

輕井澤山上の生活

講義を始める前に

私共が此の山上に出かけて來たのは決して外界の氣候空氣の良好なるを逐つて來たのではなく、實に精神的空氣を造らんと目的に外ならない。精神的空氣を造るとは、時間空間の障害を除き、目に見えない實在と接觸するといふ所にある。茲に於て私共は考を大きく廣くするために、或は歴史論を讀み、或は直接に宇宙の本體に接觸するを必要とするのである。抑今茲に現存してある一種の空氣は諸子が上つて來て初めて作られたものではない、實に歴史的に續いて居る生命であり、空間的に擴がつて居る社會的關係より生じたものである。即ちそれは各自の頭腦に構成された所からと、又相互に思想を交換し、感情を融和する關係より實に深き交通の生活より生じたものである。私が今朝目覺めてまづ最初に浮んだ考は、今日は明治天皇祭であるといふこと、私は丁度其の年今より六年前母國を離れて歐米漫遊の途に就いたといふこと、又十數年前此の山上にはじめて來たといふ種々の記憶であつた。かく種々と呼び起されるが兎に角それらは時間空間を超越し一の實體となつて頭に現はれて來たのである。實體とは實に Mental law である。決して偶然ではない。この吾人の頭に構成される此の思想に由つて此の輕井澤の精神的空氣も過去より未來に亘つて永久に作り得られるものと私は信ずる。

思ふに此の輕井澤程變化はげしく、沈黙の中に大なる活動を起し、その深き意義を現はして居る空氣は他に決して類例がないやうに思ふ。先づ過去の其の變化を短時間内に描いて見ると、既往我が女子大學校が漸く開かれ、まづ此の方針にて進めば宜しからうといふ所で、麻生學監は歐米視察の途に就き、私は留守を引き受けたのであつたが、併し私も創立に至る迄の苦心と益々重る責任とに心身共に過勞したのであつた。そこで私は其の恢復の爲めに此の輕井

澤に來たのが抑も私が輕井澤を知る初めてであつた。其の時私は養生の傍ら哲學、心理學、自然研究等をするのに此の地が如何にも適當して居るので、私はさういふ方面のものを選んで研究した。まだ其の頃の此の地は實に閑靜な土地で、耳に入るものはただ鳥、蟲の聲のみで眞に深山に入つた思ひがして居つた。私は此の自然を朝な夕な友とする事によつて私の身體は全く恢復したのみならず、深く自然の研究をする事が出來たのであつた。實に此の機に於て私は私の教育方針に對して百年の計畫を立て、又世界的空氣といふものにも深きインサイトを以て見ることを得たのである。我が日本女子大學校の教育部施設や、及び今年實施の學制案も此の時の暗示によつて生れたといつてもよい。尙又此の地を以て對來 *Internationalism* の中心とせなければならぬ事、即ち信念生活の基調、又將來の精神界の中心を此所に置くべきことを暗示された事である。さてかゝる思想が遂に日本女子大學生の爲めに、此の輕井澤に三泉寮を開き、今日の實現を見るに至つたのである。

以上が斯かる生活を起した最初であるが、それについても私共の要求に應じて此の寮舎の境遇を與へて下さつた故三井三郎助氏の理解ある同情を記念せねばならぬ。

扱て此の十何年前に考へた百年の計畫、實に重大な問題を今日も亦皆さんと一緒にこゝに携へて來てゐるのである。實に今朝浮んだ考はやはりずつと前より引き續いて來て居る所のものである。此の間種々の變化はあるが、時間を超越して一の生命一の能動的な力があつて、それは十數年の間蓄積され、又今朝の空氣にも現れ來て居る事は誰も了解する事が出來るであらう。今茲に立つ此の木にも之れをなす種々の品質があるが、吾人はこれを別々に枝、葉、がさ、がさとした幹等と知覺する。併し吾人の頭には前よりこれを綜合し、一つに構成する能力を有する故に一の木として見る事を得るのである。轉じて又今蟬の聲を聞く、又對ふの森から洩れる音樂に耳を傾ける、私の注意は轉々と

して移るに従つて斷片的の知覺となつて来る。即ち知覺は注意の續く間にのみ保ち續ける事が出来る。けれども此のすべてを一つに構成する能動的の力をも亦吾人は有するのである。

輕井澤の空氣も今朝見る如き晴々したもののみではない。恐ろしき雷電のきらめき、暴風雨荒れすさぶ夜、大洪水の日もあつた。又些の微風さへ動かす實に壯美云ふべからざる夕陽の輝きを見た事もある。まことに千態萬狀の中から十數年間のその光景や空氣を今一々示す事は出来ない。併し此の靜かな沈黙の中にもそれらの盛んな活動意志の活如として一貫して居るといふことは慥かである。そこで我々は過去に於て如何に進み來りしか、又對來如何に發展すべきかを歴史的に社會的に考へることが出来る、又その必要も此處にあるのである。吾等はこゝに來て瞑想し、かくて心の態度、精神の四圍の境遇を構成して此の自然の空氣を感じる必要がある。さうして眞に自分の心と宇宙の精神と、自分の意志と宇宙の意志とが相活き合ふ處のその空氣に接して初めて吾々がこゝに持ち來つた問題を解決すべきである。もしもこれを唯單に科學的にのみ取扱ふことに依つてこれに解決をつけようとするならば、たとひスペンサー、カント、の如き偉人の頭でゞも到底不可解に終るであらう。況して吾人の如き凡俗に於てである。眞にこの自然の空氣に感じ、各自の態度を充分に作つてこれを己れの心に理解し自らの眞の生活と爲すことに依つて始めてこの目的を達し得るのである。

▲古今未だ達せざる大問題 吾人がこゝに持つて來た問題は實に大きい。故に先づ第一に考ふべきは其の問題の中心點は何であるかといふことで、それをつかまへなければならぬ。即ち其の問題といふのは近代哲學界にて究めんとする問題と一致するものである。言ひ換ふれば、今茲に集つて考へようとする吾々の問題は實に彼のカントが畢生の力を集めて考へたものと其の究極は同じものである。あの時代カント以上の學者は世界になかつた。其の人が實に非常な集中（彼は單純な生活をなし家をも持たず又其の生活の範圍も其の周圍四十哩を出でなかつたと云ふ有様で研究

に集中した、否それでもある點以上に出ることは出來ず、遂に究極をきはめ得なかつたのである。)をして考へたその問題である。又スペンサーといふ人は元來身體も弱かつたが、其の老軀を使役して一生懸命この問題に就て書物を著した人である。併しそれは其の當時世の誰にも顧みられなかつた。が彼はもとより賣るために著す書物ではない、故にそれ等のことには省みず全力を注いでそれに従事した。併し斯くしてさへも其の短生涯に於てはよく大なる研究の全局には到達し得なかつたのである。

以上二人を例證としたのであるが、世界はかゝる偉大な天才を作つて大きな問題を研めんとして居るのである。

思想界に於ては以上の如く數多の年月を費し、又現實界に於ても、例へば今日の歐洲戰爭の如く、數百萬の人類を犠牲にしても目的地に出でんとして居る。其の問題その目的とは何であるか、といふとその答は簡單である。即ち現實の矛盾、衝突を避け、歸一に到り、思想の統一、生活の統一を得んとするに外ならぬのである。個人々々の天才も時代の偉人も、此の小天地も、又世界的人類も、小さき吾も、小さき團體も、否千差萬別の如く見ゆる萬有そのものも亦、同一原因を以つて古今東西に通じた一の大問題を持つて居るといふその根底となるべきものは皆此の人心に歸一を要求するといふ。實に此の必然的靈法 (Mental law) 即ち人間の心の底深く内在して居るそれである。此の意味よりして時代の精神にも、吾人の内心にも此の問題が起つて來るのである。そこで其の統一を求めんとすると此の總點ともいふべきものが二つに分れて居る。即ち一、唯物論、二、唯心論である。或は之が權力主義と道德主義、本能主義と人道主義となるのであるが、云ふ迄もなく其の根本の實質は皆一である。故に此の二論を研究せんとすれば必ず先づ相互の歸一點を求めなければならぬ。でなければ眞に此の二つの論據を知る事は出來ない、言ひ換へれば眞に世界を見、吾人人間界の生活に徹底することは出來ぬ。

所で先づ其の前に偉大なる人格の例を以て此の研究の歩を進めて見ようと思ふ。抑も偉大なる人格とは何か、即ち

個人なるかはた時代の精神なるか、個人が作れる社會的人格なるか、私は先づ此の説明を試みて究極の原理に到達しようと思ふ。

▲人格とは何ぞや 今茲に一本の木がある。此の木はただ見れば一本の木である、けれども之れを宇宙の實體として見る時には、決して單一なものではない。即ち宇宙の能動的思想によつて作られたものである。故に木々は宇宙の Thought の表現であるといひ得られる。之れと同様に偉大なる人格は單なる人間の一人ではない。複雑な宇宙の思想を表現するものである、即ち偉大なる人格は宇宙の思想が創造したものであると考へて間違ひはないのである。本統の偉人、所謂宇宙の問題を解決する偉人、調和統一を發見する創造者はやはり歴史的に發展し又社會を段々に擴大して來て居る。故にこれは單なる個人ではない。けれども亦一の個體としても見る事も出来る。要するに是れに就ての見方が大切なのである。デ、オリベットの云つて居る『Ego』とは一人であるが決して單なるものではなく、人類を代表した複雑なものである。『世の博物學者、經驗學者、哲學者の中で人間を動物に分類したのは大なる誤りで、これは極めて皮相な觀察、低き經驗より間違つたものである。大なる問題を解決せんには數世紀の聲を聞くべき凡ての國民の傳説等から考へなければならぬ』といつて居る。

此の『人』といふ問題の總論はグリーキの頃より起り、爾後年を閲し、時代を経て多くの人々が考へて居る。否、今日吾人も矢張考へて居る問題なのである。故に所謂歴史とは事實の相異、及び其の繼續のみを云ふのではない。實に時間空間場所を超越し、一の人格とし、其の人格の考として、これを構成して行く能動なるものとして取扱はなければ、其の本體に達することは出来ない。然るに人は目に見ゆる物質世界を見て、之れが所謂宇宙と稱するものであらうと思つて居る、さうして之れによつて思想を限定しようとする。其所に誤謬を生ぜざるを得ないのである。故此の間違つた世界即ち其の思想の誤謬は容易に超脱することが出来ない。併し其の限定的世界に於てすら今日は根本的

歸一を求めて來たのである。二つの物を同時に一つの場所に置くことの出來ぬ物質界の限定的世界に於てすら、尙人間は其の根本歸一を求めて止まぬのである。そこで此の要求の解決に古來二つの傾向の假説が立てられて居る。即ち

(1) 萬有發生の源となる物質的原形質がすべての物の生命となる

といふ説と

(2) 天命天意の大根元に於て統一せんとする傾向

とである。之れ唯物論、唯心論の原因であつて、此の二傾向は古來哲學界を支配して常に互に相争ひ來つたものである。

抑もアトーム説を立てたのは Euclids である。其の説によると『アトームは無限より無限に運動を起して止まない。其の運動の間に此の物質世界を生じたのである。故に萬有の能力はアトームが有するのである』と言つて居る。又言ふ『此のアトームには不可解なる魔力があつて唯心論の所謂神と等しき力がある』と。勿論此の説がある點までの眞理であつて、又此の解決によつて科學界の今日の進歩を見るのであつて、實に此の説は科學界に於ては缺くべからざる解決の鍵となつたものである。即ち此の説はピタゴラスの知覺説に到つて一階級を進めた。即ち『知覺はアトームの震動の力によつて生じたもので、知覺することは思辨すると同様である。總ての知覺は吾人にとりて眞理である、故にその知覺に感ずる事、其の知覺に見える事は吾人の誤謬ではなく正當なる眞理である』といつて大なる信頼を知覺に置いた。斯の如くにして是等の知覺論者は、此のアトミズムより發達して眞理に進んで行つたが、茲にデモクリタスは此のピタゴラスの知覺(眞理)は公理でないといふことを主張し、宇宙の眞の實體に到達せんとするには思考に依らねばならぬことを説いた。プラトーンも之れと同説である。即ち眞の公理は理性 (thought) に求めねばならぬといふ所謂主張説を稱へた。プラトーンは曰く『知覺は物質に關係するのみである。吾人は理性 (thought) によ

つて眞に根本實在に到る事が出来る』と。茲に至つて唯物、唯心の二論が互に旗色を明瞭にして來たのである。

そこでデモクリタスは總ての知覺をアトームに歸して、さうして心的作用は物質アトームよりも精細なるものと區別した。即ち物質と精神とは唯其のアトームの階級の差によるものとしたのである。此の單なるアトーム説が、後にエピキュラスの機械力説となつた。それがデモクリタスの説と違ふ點は、物質界には目的なしと否定した點にある。斯くて是等の假説は近代文藝復興等によつて又尠からぬ影響を受けた。即ちアトーム説は後にモナード説に、唯物論對唯心論となつたが、後にブルノーに至つては宇宙萬有は凡て同質なりといふ一元説を稱へた。即ち品質的クオリタティブに於ては同質であることが、これが外部的表面的に現はるゝ場合には、分量的變異を示すといふ説である。此の品質的といふことは、後に人格的といふ意味となつてパウソンの人格主義の根源となつて居る。近世に至り *qualis* といふことを研究したのは自然主義の功に歸するものが多い。併し此の主義は思想と活動との關係を曖昧模糊の中に葬つた。故に如何なる天才の發現も自然主義の立場より云はしむれば、其の依つて來る正當なる基點を何處に求めてよきか不可解に附して置くの外はないのである。併し人間はそれで満足するものではない。それ故ヘツケルの如きも遂に行きつまつて所謂一部を解し得ても全部に涉る事が出来なかつたのである。又スペンサーの進化論も遂に實體に觸れず、不可思議といふ逃げ場を作つたのみで遂に不徹底に終つた。

▲人格の歸一點 斯くの如く、機械説、物質主義、アトミズムと種々の假説は作られたが、要するに實體の一部を解決するに止まるのみで、而も人格といひ又宇宙の實體といふ事は、實に種々多方面に分れて複雑であるが、又其の中に一の統一したる歸一點を有してゐるものである。人間の要求は此の種々の複雑世界の中から、而も一の歸一點を追究して已まぬのである。そこで先づ此所には其の一部分の方面から擧げて漸次其の思想階級の進歩のあとを辿つて見ようと思ふ。

第一はデスチニーの世界である。即ち機械的アトミズムで宿命の世界である。人間の意志といふ事が考へ得られぬ世界の思想の階級である。それ故努力して運命を拓くといふことを知らない。遂に絶望の極に陥らなければならぬ運命を持つものである。併しこれも實際人間世界には多いことであつて、低い階級の世界であるからとて決して捨て置くことは出来ない。是等はデ、オリベットの云つてみるやうに、『人間は進歩發展の出來ざる時に其の自由を失つて人間の價値を失つてしまふ。此の進歩發展は人間の根底に動く動機である。故にこれを失ふ時は失望落膽し遂に自滅するものである』と。

勿論境遇といふことはあるが、吾人の人格には、例へば、種子が地に蒔かれたるが如く、吾人の裡には自發發展の力、其の動機、意思、自由と稱する品質がある。然るに物質主義に陥る時はどうしても斯かる力を認める事が出來ぬやうになる。又斯くの如き文明、斯くの如き進歩を説明する事が出來ぬのである。人間が所謂不徹底の自然主義、又は宿命の世界に陥つた時は吾人は運命の奴隸となつて、殘酷なる主人にその運命を任せたと同じ事となるのである。かくなる時自然は決して吾人を我が子として取扱はない。慈愛深き父子の關係ではなく、殘酷なる繼母の如きものとなるのである。實にこの思想が今日の戰爭を生み、煩悶自殺の動機を爲してゐるのである。このデスチニーは人間の普遍性の本能にあるので宿命的なものである。故に前にも述べた如く意志を活かすといふことは出來ないのである。十九世紀は此のデスチニーの世界であつた。それが今日に苦しみを殘して居るのである。併しながらこれは人間の衷なる要求ではない、言ひ換ふれば宇宙の本質は決してかゝるものではないのである。

唯物論より唯心論に到りし經過及びその後の思想

▲本章の講述概略 を纏めて見ると、人間が有史以來宇宙内の統一に到達せんとしてその理想の生活を獨立の世界に描いて種々の試

みをした。その第一の試みは『物質主義』である。——これは近代までも尙研究を續けられて居るが——近頃のこの説は物質は力であるといつて居る。力とは宇宙の力で、此の力が宇宙の總てを創り行くものであると科學者は主張して居る。故にこの力を名づけて實體の精氣ともいつて居る。

要するに物體、或は不變の物質又はイーサーと名づくるものを以つて一時はその所謂宇内の統一を獲得したと信じて一時の満足を得ないではなかつたが、この物質主義の統一は知識、心、精神といふものを否定し従つて價值生命を否定することとなり遂に絶望に至り、眞の歸一に達することが出来なかつたのである。そこでこれと同様ではあるが少しくその試みの異つて居るのは『理想主義』であつた。理想主義は時間空間を人間の意識より獨立せしめ、これを人知以上に引き揚げて獲得せんとした統一である。即ち物體を超越したものの、物體の制限を取り除いたものは、空間であつてこれこそは實に限りなき廣大なものである。又時間も、始め、終り、といふことなく永久なるものである。故に人間世界に限りなきものは時間空間であると主張したが、併しこれも矢張り物質主義以上の矛盾に陥つて了つた。——如何となれば連絡である時間は人格を離れて成立することは出来ない。即ちたゞ意識、たゞ回想の漠たる意識に於ては時の觀念の根底を失ふに至るからである。——故に時は自我歸一、自定、有効的原因、自由意志を有する人格を明かに認めざればその根據を明らかにすることは出来ない。されば時間と空間は決して獨立したる實體となすことは出来ないのである。次に出たのが人格主義である。人間の思想が發達するに従ひ其の苦しみとする所は變化と同一との調和を成し得られない所に來つた。これは必然的結果であつて常に動搖止まない事物の上に常住不滅の人格があるにあらざれば必らず矛盾混亂に陥り兩者の歸一に入る事が出来ないのである。然るにバウンが人格主義を見出すに至つてこの不可解の問題は始めて満足なる解決を下すことが出来た。

又かの理想主義に於ては、絶對が仕組んだ意匠計畫がその絶對の活動によりて織り出されたものが現實世界であるといふこと、又神の攝理を認識して其所に統一を求めたのであるが、斯の如き（萬有の土臺は偉大なる力とか絶對とかいふ）抽象的の考への結

果は自由、個性、自立を失して遂に絶望せざるを得なかつたのである。これもパウロが、『自由自動の至上人格こそ宇宙の開闢者なり』といふに至つて始めて満足なる解決を得たのである。このパウロが出て吾人の必然的に要求して居る精神界を見出し、眞に意志の王國を發見し、人生の價値、意志の自由を得、歸一の世界、歸一の宇宙を我が有に歸することを得たのである。これこそ眞に宇宙實體の基礎根本である故に、吾人は眞にこの境地に入る事を得ば從來の物質界を離れ、日夜に憧憬し要求して止まなかつた所——即ち吾人が如何にして實體に到るべきかとの問題——を満足に解決することが出来るのである。

實にこの眞義を知る時は吾人の心靈が神を憧憬する事實、美を喜ぶ觀念を説明する爲めに或は原子の運動や分子の腦細胞に變化するの跡を辿つて見るなどの必要はなくなつて終ふのである。實にこの實相を探る時は、心と物とにそれ〴〵性質を備へ法則を有するは、これ相互に相感應し共働する爲めなることを知るべく、又總てを抱擁し總ての中に活動する至上人格者の中に眞に心と世界の綜合歸一を見るに至るのである。以上

▲宇宙の無限の眼 吾々人間には二つの眼を與へられて居る。これによつて宇宙の物象のすべてを見るのである。或る日或る人々と偶然にこの話が出て遂に人間の眼と又蠅の如き複眼とについてその活らきの差を話したことがあつた。この複眼の活らきはいふまでもなく、前後左右上下何れの方向をも同時に見てこれを綜合するので、人間からいへば實に不思議な活らきをなす眼である。前にもいふ通り、人間の眼は唯二つである。けれどもこれは又見るといふ目的について完全に出來て居て一部分一部分宛を瞬間に轉じて見る活らきが與へられて居る。さうしてその眼に映じた事物は時と場所に關せず頭腦に印象を残してよく綜合し、組織して茲に或は一大思想をも構成するのである。

この事を宇宙の無限に較べるのには餘りに小さいものではあるが、これに依つても亦宇宙の實在といふことを暗示されて居るものとも考へられる。

宇宙の實在は無數の眼を有して居る。それは單眼の活らきをも爲し又複眼の活らきをも爲すものである。例へば人

間の眼の如く、一部分づゝを注視し瞬間に他より又他に轉じて行くことも出来るし又同時に多方面を見てこれを一つに綜合して行く複眼の如き活らきをも有して居る。即ち一方面より多方面、多方面より一方面とその見方をかへて千差萬別、無限なる部分を備へたる實體を見それを組立て、行く無數無限の眼である。この宇宙の無限の眼とは何か？即ち歴史が示す時代精神の眼である。カントもこの宇宙の一つの眼である、スペンサーも亦他の一つの眼である。すべての哲學者、宗敎家、偉人等は皆此の宇宙の實體を見る眼である。吾等も亦、此等を綜合して古今東西を見得る所の知の眼を與へられて居る、即ちすべての人間は宇宙絶對者と同じ根本性格を有するものである。これあればこそ吾人は歴史を調べ種々古來の學説を知つてこれを己の頭腦にて組織し構成する事が出来るのである。即ち自分にては見ることの出來ぬ目を自分のものとしてこれによりて全體を構成し得る力を與へられて居るのである。

人間の個々の眼界といふものは誠に狭く限られて居るものである。それ故にその一局部にのみ囚へられて居つたならば僅かなることの研究をだに到底その目的を達することは出來ない。所がこの宇宙の眼にも準ふべき共同研究といふことがあつて始めて古今東西に互つて多く又廣く、眼界を構成することが出来る。かくして人文の進歩發展も得られるといふものであつて、實にかゝる眼界を以て共同的研究をなすといふことは、とりも直さず我等個々の人間が宇宙の眼となり宇宙の生命の中に融合して永久無限の世界を達觀することが出来るといふことが出来る。即ち研究の努力といふこともこの點に着眼することを忘れてはならぬ。

▲カントの理想主義 さて、屢々繰返すやうに、若し宇宙に、目的的原因といふものがなかつたならば到底萬有進化といふ現象は起らないのである。故に前にも説いたアトム主義、機械主義、自然主義のみにては唯失敗を終局として何等の見るべきものもない。そこで、此等の主義の行き詰つた時、茲に新生面新活路を開いたのが彼のカン

トの理想主義である。此の時までは『吾人の心靈はたゞ他より印象を受くるのみ』とせられて居つた。ロツクの所謂、『白紙上の外界の事物を書き記すに留るもの』とせられて居つたのであるが、カントは『吾人の經驗は總て我が心靈それ自身の活動的構成に依る』といふ事を發見したのである。又時間空間も吾人の心の活らきより起るものとし、『空間は思考の進行に於ての必然的形式である』と説明した。(これは經驗して得たといふよりも直観にて得たる眞理を見出して説明したものである。)これは實に思想界に多大なる貢獻であつた。

併し、後世この説の最弱點といはるる所のは、經驗を輕じ時間と空間とを全く主觀的方面に限つた事にある。——もつと完全な見方は他の者よりも見るといふこと即ち客觀的に觀るといふことであるが——それが失はれて居ることである。

併しながら當時彼が物質的缺點を補うて有効的原因を加へたこと、又その物質主義を改めて科學の行き詰つた點に活路を開いたといふことの非常な進歩と甚大なる功績とは打消すことの出來ぬものである。

▲經驗主義起る 斯くて、——物質論が極端になつてその弊を發した如く、——理想主義も亦、極端に走つては免れぬ弊害に陥つたのである。絶對的理想主義は即ちそれである。この主義は遂に形式に流れ人間を迷信に導き自由を束縛し、生命を涸渴せしめた。そこでこの弊を改め、其の病根を絶たんとして起つた一運動がある、それは經驗主義である。この主義に起つた科學者宗教家政治家等を今茲に一々擧ぐる違は到底ないが要するに曩に物質主義を改革せんとして起つた理想主義が思想界に貢獻する處も尠くなかつたが、それはあまりに急に又あまりに主觀に重きを置き經驗といふことを無視した爲遂にその弊に陥つたので、今度の運動はその弊を補うて、彼が靜的である(形式で固定して)のに引かへてこれは動的(經驗實驗を重ずる)に、彼が主觀を重ずる如く、これは客觀的方面をも輕じない、つまり實際的經驗を重じたるのでその思想界に貢獻する所は更に一步を進めたものである。

この運動の主要點たる經驗といふことは爲し試みるといふことであつて何事も實際に經驗した上でなければその實證は得られぬものである。それ故未だ經驗のないものはすべて未成品に屬するといふのがこの説の主張する所である。従つてこの説そのものも種々の方面に分れ混亂錯雜して非難の點も多かつたが、それは又この説の一大進歩の階段であつた。即ちこの説は近世に至り次第に精選せられ統一されて來て今日にては喜ばしき傾向に進んで居るのである。左にこの經驗主義に屬する人々の主張と及びその經過についての一二例を擧げて參考に供することとする。

▲**コントの實證哲學とゼームスの實際主義** コントの實證哲學でいふその實質は社會（人類の經驗にて生じたる）である。これが後發展して今日にては國際主義に迄つき進んで來たのである。又ゼームスの實際主義は、或る學者はこれを人格主義と動力論との融合したものといつて居る。要するに眞理は實際的結果を有するものであると主張するのである。——これも矢張あまりに實際的にのみ傾いたところに缺點を有して居る。——この缺點を補つたのがバウンである。さうして更にベルグソンの創造的進化に進み又オイケンの哲學に進むに至つたのである。抑、從來の理想主義とこの實際主義との兩極端を調和せんとしたのはロツチエに始まつて居る。茲に、バウンがその實際主義を補つたといふのもその初めはロツチエの助力に負ふ所が多い。

▲**ロツチエとバウン** 絶對的理想主義に、先づ叛旗を掲げたのは、實にロツチエといはねばならぬ。しかしどちらかといへば彼は理想主義に入るべき人である。——が、たゞそれは絶對的理想主義ではない、——彼が改革を企てたのはその理想主義に科學的思想を調和せんとした所に在る。彼は人の知り得る範圍に於ける總ての事物は互に共動し影響し合ふこと、又心と物との間には本質的統一のあるべきことを證明し得る事を發見した。さうして彼はその使命を感じて起つたのである。彼は先づヘーゲルの絶對的理想主義に鐵槌を下した。即ちヘーゲルがその主知説を以て人間がその反省に依りてのみ宇宙の目的に進み得るとしたその弱點を捕へたからである。

ロツチエの保持した目的は思想に知覺を與へるといふこと、即ち自然の經驗知識を供給するといふ所にある。故に彼の哲學は抽象的思辨に反對し空虚なる形式を斥け具體的事實的觀念を主張した。即ち抽象的概念や實質なき範疇にて構成したものは生きた實世界のものに比較すると實に貧弱で淺薄皮相たるを免れぬ事を證明し決定したのである。故に彼の歴史論に實に生きたるものを取扱つて居る。曰く『歴史はもとより仕組まれ考へ定められたる計畫が次第に翻譯せられて出て來るものよりも尙以上に深き意味を有するものである』と。

さて茲にいふ『尙以上に深き意味』とは何であらうか、それは即ち意志の自由といふことである。我等は今この意志の自由といふことについて考へて見なければならぬ。さうして又尙この世界を構成する三つのもの即ち宿命、意志、天命（神意）といふことに就いても考へて見なければならぬ。

神意の目的は總ての人間を完全に到達せしめんとするにある。即ち目的的であるといふ事に在る。ロツチエ曰く『この目的を進めて行くものは時である。時は無限の活動持續をその内容に有して居る』と。ところで自然は宿命的のものであるが人間はこれを利用してこれを切り開いて行くことが出来る。何に依つて切り開くか？ 即ちそれは意志である。人間の意志が宇宙の意志に合致することに依つて宿命の世界を切り開いて行くことが出来るのである。さういふと又或る人はいふであらう、『人間は天命（神意）に従つて行かなければならぬ』と。併しながら、神意も全くそれのみに支配さるゝ時は人間は目的的存在でなくなるわけである。故に——絶対ではないが——人間の意志といふものも與へられて居るのである。こゝに人間の自由も存し又責任も在る所以である。ロツチエの歴史論の結論には次の如く言つて居る。『宇宙は神意よりも、それを作る永久の思想よりもそれ以上の物を有して居る、即ちそれは一つの能力（自由なる可能力）である。これによりて獨立無双といふことをも保ち得らるのである。又この自由を欲することは人間の已むべからざる根本要求の事實である。これがすべての現象の實體である』と。

斯の説がヘーゲルの主知説を露骨に暴露して爾後の思想界に新生命を與ふる出發點を示した。即ち極端なる理想主義の弊とする所は前にも述べた通りこの經驗によらず單なる思考のみによつて實體に到達し得るといふにある。然るにロツチエは思考の外に經驗の大切なるをいひ、又實體に達するためには内面的連絡を得なければならぬことを力説して『吾人が實體を悟らんとするにはこれを分解し得る要素を先づ知らなければならぬ。又その活動の法則をも辨へ尙その目的地に歸一點をつかまへる事が大切である。如何となれば法則は單に出來事の連續を形式に現はし、又經驗の事實を表に作つて示したるに過ぎぬものであるからである。故に法則は根本活動の原因、關係の一部を現はしたものである。されば吾人は此の法則を見て劃一の外部的目的の根本に遡り其處にこの統御の目的を一瞥せねばならぬ』と。

斯くの如くにしてロツチエは己れの主義に價值の觀念を與へ、それより出發して實體の法則を示し、又實體は無限の目的を實現（即ち宇宙自ら實現である）するといふ結論に達したのである。

而して、その絶對目的は善である。つまり宇宙は善に達する法則によりて支配され、宇宙の各部分は善に統一されて居る事に歸着して居る。かくして彼は『至上善が究極の本体であり其の他の實體は（吾人個々も實體である）その大本の中に各自の本体を發見することを得て茲に眞の統一を見出すことが出来る』と云つて居る。

以上が彼の理想主義の大本である。尙これを明にし又次に起つた人格主義を研究する爲に彼とバウンとの共通點及相違點を擧げて見ようと思ふ。

即ちこの兩氏の一致點は、科學と哲學の立場を明にした處に在る。

第一、科學の立場を實行方面に制限して、現象世界を共在及びその連續の秩序に限つた。

即ち科學の立場は人間實行の方面であり、知識は現象の共在と連續の秩序を説明するものとした。

第二、哲學の立場を能動的効力ある原因の領分に當嵌めたのである。この現象を作る有効なる原因即ち實體に到る事は形而上學的に直覺的に人間心靈の活きと冥想によつてななければならぬ。即ち精神的經驗に依つて行かなければならぬとした。

茲に於て『科學者は現象を實驗し活動、共動の法則を研究するもの、而して現象の原因に遡り實體の性質を發見するは哲學者の領分』なることとした。さうして其の根本原理を探るに科學の分解分類に依つて知らんとするは實に愚なる試みであるとした。以上は兩氏の共通點である。實に分類は知識の開拓をなすもので決して根本の實體に到達することは出来ぬのである。又アトミズム、機械主義の有効的原因があるといふ要求を破壊して『アトミズムによつて目的に到達し眞の進化に到るといふは空想にて實に不可能なることである』とした。茲に於て從來のアトミズムの根柢は全く破壊された。

▲パウンの至上人格主義 前述の如くパウンがロツチエに負うた所は實に尠くない。併し又彼がロツチエの短所を補つた點も亦尠からぬやうである。所でロツチエの缺點とする所は實在の定義を下すに明瞭を缺き徹底するに到らなかつた點の多いことに在る。これを受けて尙一層の研究を積み尙一層の努力を以て時代の要求を充たすに足るものとしたパウンの活きは大なるものといはねばならぬ。ロツチエは事物の裏には必ず共同があり連續があると迄はいつたがパウンはこの共同連續はたゞ人格に於てのみ求め得べきものなることを斷言した。即ち人格といふ力の實在を除いてはロツチエ及び其の時代が重んじて居る共同連續は不可能なること實にこの力に依てのみ、時間空間の切れの經驗を統一し、總てを一の標準より見、眞の統一を意識し得るものとしたものである。そこでロツチエが實體を至上善と稱したのをパウンは至上人格といつて居る。

(これ等の二標語は實質に於て差違はない)この至上人格とは後に多くの哲學者も言つた所の意志と同じである。デ、のであるが前者は未だ不明瞭の點がある)

オリベツトは『人間の理想郷』と名づけて居る。その他、意志といひ人格といひ、目的的事實在といひ皆同一の實質の標語である。

尙、パウンはロッツエ及び他の多くの哲學者と共に次の三つの世界を認めて居る。即ち、『宿命』『意志の自由』『神の普遍的内在(攝理)』といふことである。これを言ひ換ふれば自然と人間と及び神の世界、ともいふことが出来る。之等を調和統一せるものが『人格』である。

人格主義、目的的生活といふは皆その歸一點に至上善を見出すものである。此に於て初めて十九世紀の問題として苦しんだ矛盾窮境を脱し、又現在實生活に於て精神的にも經驗的にも亦宗教的にも世界的歸一を憧憬して止まぬその根本歸一に到る道を開いたのである。

彼がその歸一に到達した内容を約言すると、『自然と意志と神意との三つの眞融合』といふことである。心と物、科學と哲學、道德と經濟、國家と國家、人と人が、互に永き衝突をなし事實背反した世界をして新しき建設に向はしめ新文明を生まんとするに至らしめたといはねばならぬ。實に人間の理想は第一自由を實現せんとし、第二社會的理想を實現せんとし、——即ち國際的道德、國際的歸一——尙進んで宇宙的實現を獲得せんとして居るのである。パウンが畢生の力を致して獲得したのはその宇宙の祕鍵となるべき人格主義であつた。これこそ人間の憧憬して止まぬところの實在即ち宇宙の統一に眞に到達し得る眞義である。

彼が畢生此の問題に腦力を費したことはその著書に依てうかがふことが出来る。その主なるものを擧げて見ると『人格主義』『純正哲學』『唯心哲學』『基督教研究』『宗教科學』『認識論』『倫理學』等がある。その最著名なるものは即ち人格主義である。これは現今『人格的宇宙觀』として邦譯せられて居る。

信念生活の経験（歸一はその眞髓）

信念生活の目的は大生命に歸一する——即ち究極的歸一、眞の實在に到達する——といふ所にある。如何となれば、此の根本に達し得ざるものは第一義の生活に入ることが出来ず、常にその門口に迷ひ、或は矛盾衝突煩悶苦痛を招き、自暴自棄に陥り、遂には絶望の淵に足を運ぶ、その結果精神病態となり甚しきは自己の建設中心なる人格の中に分離を起すのである。即ち歸一を實現する事能はざるに至れば我が人格の帝政は叛亂の状態に陥り、ここに病人となり自殺破滅をなすに至るのである。往々見るところの所謂二重人格者或は三重人格者といふもの、又は種々の精神病者の原因を尋ねて見ると、多くはこの歸一を得ず眞の慰安なきより其の結果を來すものである。而して人の一生涯中、この信念生活について最大切なる時期ともいふべきは所謂青年期である。この時に於てこの徹底に到り得ざるものは多くは自己破滅に陥るのである——この適例であり又それが詩的であつたが故に多くの同傾向者に暗示を與へ同病に陥らしめたのは彼の華嚴の瀧の自殺者である。眞に青年が眞面目に考へ及んだその根本要求の解決を得ざる場合或はその實現せられざる場合にはかかる状態に陥ることはあり得べき事であつて、青年がこの状態に陥る近因は、或は友人間に調和融合を得ざる爲とか、家庭の不和とか種々あるであらうが、要するに人間の潜在意識中にこの熱狂に追究するものがあつてこの要求が正しく解決され統御さるるにあらざれば、遂に救ふべからざる結果に到るものである。實例は世に多い事である。否青年の病氣及自殺の原因の多くは此所に在るといふも過言ではあるまいと思ふ。ゼームスが宗教的經驗の種々をあげたる中にも亦他の心理學者が心理學の方面より掲げたる例證の中にも以上の如きものは甚だ多い。そこで若しこの指導宜しきを得ずこの苦悶を救ふことが出来なかつたならば人々は皆遂に破滅に至るの外はないのでこれ實に人生の危機といふべき時である。眞に、これより生れ出づべきか又は永久暗黒の世界に葬られ

去るべきかの生死分別の秋である。若し眞に生れ出づるを得ばこれ實に眞生命の誕生である。

▲宗教の實在は同一物である。吾々の周圍にも斯かる實例は屢々見る所であるが、ゼームスが斯かる経験を蒐めて如何なる結論に到達したかといふに、曰く、宗教の経験には種々なる形あれどその眞髓は同一に歸するものである。たゞその境遇事情、發達の差異即ち様式の差異に基因する相違あり、と言つて居る。境遇、事情、四圍の關係より種々の形式となつて居ることは比較宗教に於ても理解し得る事であるが、殊に茲にゼームスが説いて居ることで最味ふべき點は『宗教の實在は同一物である。但しその表現に或は信條に相違の點のあるのはこれは知の發達の程度によるものであつて、其の例證の大多數は宗教的經驗を持つて居るけれどもその意義を充分に解決することの出來ぬものが多い』と言つて居ることである。即ち人間の多くは自己の宗教的經驗をその頭腦にて解剖し分類し綜合し構成することが出來ないのである。又自分はこれを感じ得るもこれを他人に發表し又説明する所の能力を持つ者は甚だ稀である。

然しながら宗教は生命であつて決して解決ではない。これは前にも述べた通り科學の分類又は範疇等はたゞ外部の殻であつて宗教はその内部にあるものである。故に所謂宗派宗別などいふものは唯その外部の形式に外ならぬものであつて人間が常に憧憬して止まぬものは決して形式に支配されるものではないのである。實に如何なる宗教もその眞意に相違はなく、その信仰より出でたるものは決して形式に支配されるものではないのである。

彼の何れの宗教界にもその一面には崇敬すべき高僧もあり聖者もあるが又他の半面には偽善者もあり迷信者のあるのも亦免れない事實である。これ即ち其の徹底したるものに二なく宗別によつてその歸着點を別にするものではない。斯の如く、儀式信條——頭の中のみ分類解釋等の知識——に依つて人間の實在即ち人格に何等の變化影響を與へるものではなく又その發展價値を與へられるものではないのである。これ言語や、狭い智識や、儀式や信條など決

して宗教の生命、眞髓ではないといふことを明かに證するものである。

▲誕生の經驗　吾人の眞の生活はこの經驗を實感し實行する事によつて自ら人格の中に變化を起す事である。この經驗を宗教上では生命の誕生というて居る。——實に生れ變る程の根本の進化内部の變化を來すのでなくてはその眞に達し得たとは言はれないのである。——教育上ではこれを發展というて居る。これは人格の要素と要素とが所謂融合し、團體と團體とが融合して初めて生れるので此所に至つて宗教の眞髓と教育の根本努力とは其の根柢を一つにするといふことが出来る。故に其の人格に發展なく、信念生活のなき教育は死物同然である。斯の如きは教育も亦一つの形體に過ぎないものと曰はざるを得ざるものである。然らばその進化發展とは如何なるものか、これを一言にすれば全人格が根本的に變化しその人の興味、趣味、傾向、目的、理想、品性行爲が根本的に變つて行く事である。尙具體的にいへば他人にも解され、自分にも解るやうに根本が改善せられて其の人格が新らしくなり從來の近視眼的なる自己心が崇高遠大なる興味と變り、野卑なる快樂が理想鮮明なるものに向つて變化し、今迄は自己以外の總てに嘲笑冷罵を以て接したものが眞面目にその經驗を愛し、誇慢不遜の態度を根本的に改めて人格發展の障害となりし外壁を壊し、意志默考を獲得し、善意を發揮し、大なる目的の爲に奉仕犠牲の生活を始め根本なる宇宙的なる調和統一を實現するに至るのである。かかる人格的なる變化を信念生活又は教育的生活、修養生活といふものである。此所に至る様式にはその人とその境遇とに依つて種々であつて、時には根本的に急激に來ることもあり又時には靜かにその人生を潤色して來る事もある。

此の人格再生とも言ふべき人類の經驗を氷山の譬喩を以て面白く説明して居る。

彼の大洋に流れ來る冰山は實に危険なものであるが、舟がこれに乗り上げる迄はその如何に危険なるかを知り得な

いのである。如何となれば水は水の重さとその差が著しくないだけ沈みもせず浮きもせずして多くの部分は水中に隠れ水上にはその小部分を現はして居るに過ぎない。故にこの航海中に最も怖るべき危険物——その存在に依つて船の運命を決する程の一大事件——と言へども、これを表面より見たゞけでは判定し難い。そこでこれを人生に譬へて三様に解いたのである。

一、『人間は人生といふ大洋を航せる船である』

その人生の面前には危険なる水山が流れて居る。しかしその危険物の近づけるをも多くは知らない、さうして吾人はその眼に見えない危険物にわが運命を奪はれるかも測り知ることが出来ないのである、それ故経験なき人生の行路者は常に他人の経験を参照し己が航海の進路を定めなければならぬ。

二、『深き大海に浮べる大水塊は常にその中心點を變じて居る、恰も吾人の人格の中心點の變化し動くが如くである』

水塊は其の表面に現はれたる小部分さへ全く匿れることがあるかと思ふと又再び浮び出で、而もその時は全く其の位置を轉じて居ることがある。斯の如く吾人の人格の中心點も變化し動くものである。吾人はこの中心點の變化に依つてその表面を異にして居る。即ち人格とは歸一であるけれどもその歸一には複雑なる要素が含まれて居る。それ等が結合するのであるからその調和歸一の宜しきを得ない場合に於ては二重或は三重の人格を作ることがある。これはその一人の人格の中に中心點がいくつも出來てその一團一團が離れ離れにその一部分宛を現はし又その混雜状態の心を表現するからである。

併し誰れでもその人格を作つて居る要素といふべきものには三つの中心點がある。その大中心ともなるべきものが人間の所謂意志であるが時として吾人はこの中心點を動物界に置くことがある。この時に人間は暗黒世界に陥るので

あるが、つまりこの中心點は常に變化して行くものである。中心點が變るといふことは即ち組立の變つたことで人間の力の回轉、即ち人格の變化である。これが或る場合には混沌とした思想から秩序整然とした思想に變り行くことがある。これを稱して人格の向上發展といふ。即ち斯る人はその經驗を積んで行けば遂に第一義の生活に迄進み至ることが出来る。

併しこの變化は人の潜在意識に在つて起る現象であつて自分にも他人にも氣付かれない中に起る事であるが、一度その人格が變る時は、その人の心の表現たる態度行爲に變化を來すものである。然るに若しこの變化が反對の方面に向く時は即ち人格の難船であつてその船は遂に破壊し了るのである。故に吾人は常に努力してこの人格の乗るべき船、即ち生活を建設し行かんとする所以である。

三、『心が永久の世界に入る變化である』

前にもいふ通り、心は變化自在のものであるからその修養の方法に依つて或は他と融合し或は孤立の状態に入るのである。この融合は即ち人格の擴大發展であつて、孤立は停滯涸渇である。その時——即ち人との融合が得られなくなつた時心は全く肉體に於ける癌疾の如きものとなつて人格の致命傷に陥るのである。故にこれを切り去るに非らざれば遂には人間社會の生活を爲し得ざる窮地に陥るより外、術もないことである。孤立はつまり神との交通、友情の親愛、社會團體の結合よりも離れて全く全體の通路を塞いでしまふので、恰も氷山が水の中に在りながら固結し冷却して居るやうな有様である。併しこの氷山も南方に流れ次第に溫暖な氣に觸れる時は其の冷たさも解け遂には他の水とも交るに至るのである。これは即ち宗教生活と同様であつて、他の温情四圍の境遇により頑迷なる自己も解け、他人より受くる温情にも感じて感謝の念が起るやうになるのである。この經驗は即ち宗教でいふ所の發心である。

▲歸一は人格の進歩　そこで、歸一とは相聯合しあふこと、即ち心の情、心の眞實、意志其の他の中心が融合し結合

し心的法則に従うて發展する状態をさしていふことであつて、歸一は即ち人格の進歩發展である。人間がその四圍の境遇に對する時は、必ずその影響を受けるものである。さうして、或は破壊か、或は建設か兩者の何れかに定まるものである。恰も船が氷山に遭つた時或は乗り上げるか或は烈しく衝突するか何れにしても烈しき變化に遭遇すると同じである。ドクター・ミツツエルがこの轉化に就いての研究にかく言つて居る（——彼は非常に集合といふことを力説して居る人であるが——）『強き情に伴うて起る出來事ある時は人格的潜在意識の中に分離を生ず』と。即ち人間が大變化に遭遇すると從來の感情動作等の一團に加入せし所の追想が無くなつてそれを一つのものと結合して思ひ出す事が出來ないやうになるのである。此所に於て聯合が分離し綜合の役目を盡し得ず前の人格とは全く變つた者となるのである。

これに就いてプロフエツサー・ゼネーの説く次の不幸なる一例を掲げん。

▲人格分離の悲惨 『既に末期の甚しきに至つた肺患を病み而も非常なる貧苦と戰つて居る母を看護して六十日間殆ど眠りもとらず唯そを恢復せしめんことのみ希つて居つた娘があつた。然るに母の病狀は日増しに病勢が募つて娘の切なる心づかひも何の甲斐なく遂に死の床に横つた。娘は悲しみのあまり猶もその死より蘇生せしめんと切望して其屍を抱き起し床の上に起たしめんとした。然し永き看護と甚しき心勞とに疲れ切つた身體はその母の死體をささふるに由なく己れも共に仆れたのであつたが、娘は尚こりず再びそれを繰り返した。

併し到底それを成功する筈はなく又母を再び蘇生せしむる由もなくして遂に野邊の送りを終つたのである。然るにその娘は母を愛惜するの念烈しく、その情の益々切であつた爲め遂に病氣に罹りさては時間空間に對する意識を全く失ひ、ただ母が臨終のその状態をのみ繰り返し繰り返し試みた』といつて居る。

これは實に慘ましき例であるが、人間は誰でもその根底に於て信念的憧憬を有して居る、そは歸一に到達せんとの

要求に外ならぬものであつて、これが理想となり、この理想を追求することが信念生活である。これを心理學的に解釋する時は『信念の中には必らず一つの活らきの根がある、これを願望と名づく、これこそは思想の父である』と或學者は言つて居る。この願望が發達して行く時は理想となるので、さうして此の願望の中には意志を有して居る、意志の中には或る流れ——即ち活動——がある。吾人はこれを信念と名づくるのである。故にこの信念の生活には強き根を有し、これが憧憬、愛、人道の經驗を生むのである。吾人の深き心の内容、即ち其の實在を探す時は必らず偉大なる或る永久に信賴すべきもの、言ひ換ふれば一身を捧げて奉仕せんと希ふ熱烈なる愛、熱烈に憧憬する、その目的物のあることを確信する。この目的物こそ至大の人格であつてこの心の現はるることに依つて親子、兄弟の愛、各人相互の調和を得るのである。吾人がこの根本に入らば其所に絶對者と調和歸一して眞に獨立無比の者の存在を認め、其の至上人格者と抱擁することが出来るのである。この吾人の心の根底に憧憬して止まない至上人格は宗教の實質となるべき本質なる人間と、其の偉大なる者との間に友情の關係の出來得る實在者である。而してこれは宗教上にていふ禱りによつて直接に接觸し交通し得らるるものである。即ち瞑想によつてその目的あり意志あり感情あり思想ある神を認め得ることが出来るのである。實にこの神の實現を研究し認識するのは瞑想によるのである。

要するに吾人には神性佛性がある。これによつて相共同し大生命に到るといふ信念を持し得るのである。即ち吾人の信念生活の經驗とは神と吾人とその二者の間に *Oneness* を意識し、直接にその感化を受け同一生命に聯なることを意識するの境界に入ることをいふのである。

自念生活の領土 (上)

— 内部を見よ —

我等が今までに辿り來つたのは意識に表はれた外部である。即ち彼の氷山の水面に浮んで居る部分である。故に尙意味深重なる中心點、根本問題は深く水中に潜んで居るのである。さうして其所こそは自念生活の領土である。

今より我等が尙深く考索せんとするものは、その水面より深く秘められたる所の感情、潜在意識、意志等の世界である。即ち先づそのたどり行くべき道は感覺の世界、次は情緒情操の世界である。それより一致同意の世界に入るのであるが、しかしこの三つは決して實際に於ては分つことの出来ないものであつて、感覺が感情となり、感情が同意となるのである。この三つが最大切な土臺であり、門口であつてこれは實に天地に充ちて居る空氣、大洋に流れて居る水、宇宙に動いて居る精氣の震動である。これらの眞髓は審美的實體である。言ひ換ふれば此處に自念あり、憧憬あり、愛あり、憎みあり、追慕もあり、怨恨もあるもので、さうして自念こそはこの審美的實體に通ふ生命である。即ち言葉を換へて言へば愛するか憎むかの拒諾である。如何にすべきかの考察である。斯うして或は自分を深く見、或は又宇宙につきて深く考ふる所に激烈なる情緒が起るのである。かの敘情詩等に現はるゝところの感情は多くこの情緒、情操である。

又かの藝術に現はるゝ醜美の感覺より起るそれも美は即ち喜びであり、醜は即ち憂ひ煩悶苦痛である。さうして我等は此の喜びに入るか煩悶に入るか、或は悲觀の宗教を信ずるか希望の宗教を信ずるか、その兩極に對したる時に人間の自己の態度が定まるのである。即ち此處に己れの自由が存するのである。言葉を換へて言へばこの自由を實行する事、即ち自己の態度の拒諾である。又思考より云へば眞理につくか、僞りに屈するかこの態度が拒諾に活かるのである。

而して此處には常に自念が活らいて居る。然もそれが融合したる一の生命即ち宇宙の大生命と通ふものとなりたるものは實にこれ美であり、麗はしき自念の生活、麗はしき心情の活動、麗はしき情緒情操の表はれとなるのである。

▲自念の生活 さて吾人が内なる實體の世界に入らんとするには、感情の門口、美と云ふ額の掲げられて居るその入口より進まなければならぬ。茲に於て美の實體そは何者であるかを知る必要がある。即ち美の門に入る事は自念の生活を始める事である。美の眞髓は自念と自念（我が自念と神の自念と。又人の自念と我が自念と。）の交通生活をなす事で、これは天地の美であり、眞の藝術家の描く美である。此に於て自念の骨髄は、情緒情操を直感し、其の本質に觸れて起るところの感情であるといひ得る。故に美の情緒情操の要素として愛と善とは互ひに離す事が出来ない。言ひ換ふればこの二つは美の要素の全部である。

▲審美的價值 これは情緒情操の内面的本質に存して居る。美の要素には利益のつきそふものが多いがこれは直に其價値の要點を内面的に置いたのである。言葉を換ふれば審美的價値は自念的經驗にある、即ち己れと宇宙との交通融和にあるのである。抑々自念といふ中には願望あり、憧憬あり、又満足がある。即ち己れの内容を充實したる内容の満足である。つまりその満足を自分の中に保留して置く事である。美の生活は外に放散するよりも自我の中に満足しうる自我を充實し、眞の己れに立ち歸り自分の價値に満足するが如き經驗である。實にこれを指して自然の生活といふのである。

此の中には勿論瞑想、禱りといふ状態がある。自我に満足するのは自己の自念と宇宙の自念とが融合して此に喜悅の情が起るからである。美の感には一種の敬慕すべきところ憧憬すべき所がある。これあるによりて自念の生活は愛と愛とが融和し、禱りと禱りとが活らき、訴へと訴へとが相合ひ、感謝と喜びとが相合する働きをなすものである。美を拜むとはこれである。實にさう爲さなければならなくなるのである。尊崇せざるをえない美、神の現はし給ふ美、天地にあふれるその感情が自分の深き感情に感銘する時、其所には必らず自念せざるをえないのである。嗚呼聞け、天地は神の音楽に響きわたつて居る、それを眞に聞き、それに共鳴して歌ふとき、そこに天地絶對者と吾れとの

間に、同情同感が起り、目に見えない交通がひらかれるのである。これこそ實に美を眞に見、歌ひ、味ひ、其の深き意味を體得するのである。

▲宇宙の歴史的美 又自念殊に宇宙的自念の中には歴史的美がある。これは無限より無限に渉る歴史的美である。前にも云つた如く歴史的信仰には憧憬、同情、及び進歩發展がある。此には先途を思ひ、目的を思ひて計畫し、それに心を傾注する所の深きものが動いて居るからである。ここに天地の秩序あり、これに従つて進化あり、發展があるのである。——これを區別する爲めに宿命の世界、意志の世界、神意の世界を擧げたのは前の如くである——斯くの如き事を自念するもの、永久より永久に計畫をたて、理想をたて、宇宙的實現を試むる者は神のみではないのである。實に我等人間の意志感情といふものは此宇宙の絶對美を見うる眼識を付與せられて居るのである。歴史の中には神の意志あるを認めるものであるが、吾人は恰も神と等しく天地を開闢し、その意志を以て目的に活躍しうるのである。故に吾人は將來の人類の爲めに神と同じく自念して居るのである。實に吾人は神と共に百萬年後の事を今日より自念して居るのである。

以上の如く吾人は何等かの目的を有し、計畫を持ち、善意を永久に發展し行かんとの望みを起して止まぬものである。故に吾人の眞の満足は普遍的なる神の恵み及び美に現はれたる喜びを自念する處にあるのである、又これが美の根本要素である。

一體美の感情、即ち自念の心情は何より來るか、或は物質の震動よりなるか、或は精神界よりなるかといふと、これは實體に就いて研究した從來の知識に問ひ、吾人の深き心の經驗を冥想する時、矢張それは後者であると斷定するに憚らぬのである。又少しく事物を深く見れば必然的にこれを感じるのである。若し假りにこれが精神より生れ出たものでないとする時は、美の價値はただ空虚なるもの、取るに足らざるものとなるのである。即ち美を感じるとは同

情、——即ち靈の交通——に到るのであつて、これは吾人が自念生活の實際に入る爲めの必要な條件である。即ち自然の感情は美そのものであると言ふ事が出來よう。

▲藝術は人格の發表 尙此に自然の美と、藝術家の創作する人工の美とにつき區別する必要がある。その人工の美は原因の發表である以上は其の根本は心にあるのである。人間の描いた繪畫、彫刻、詩、文章等は皆頭腦の產物人格の精髓の發表である。而して其要素は自然より取つたものであり、又その技術は自然に學んだものであつて、一として人間がその基を作つたといふものはないのである。而してこれを發現した藝術家と自然との關係は決して偶然に成るものではなく、必らずそこに精神と精神の交通即ち眞に美を見る事、美を寫し出す事が出來て初めて創作し得らるゝものである。

併し人工の美は自然の美が眞に宇宙の目的に適つて居るのに優ることは出來ない。完全是決して人工では求められない。如何に美であるといつて、人工の美は只一部分であつて全部ではない。而して、自然の思考は自然美の中に確かに認め得らるるのである。これは哲學から、科學から、又文學からの何れにても其れを知る事が出来る。

又自然の藝術と、人間の寫した藝術とはその根本に異なる點がある。即ち自然の活らきは常に生きて居るものであり、最も微妙に、今のこの瞬間も働いて居るのである。實に自然美の原因は創造的精靈なる事は疑ひなき眞理である。

▲信念生活の根底 吾人が同情的に個人や、國家や、社會や人類の運命を考察する時に最も強き最も激烈なる感情が湧き出で、來るものである。これ即ち吾人の信念生活の根底を固むるに到るべき歴史的過程であつて其の眞髓は文學的、劇的であり又敘情詩的のものであるからである。此の歴史的美を宇宙の美として見んとする時吾人は自念生活によるのである。實に吾人は劇の同情的觀客である。故に劇的希望や、劇的心配にて心を震動するものである。これす

なはち人間の自念である。此に於て世界の歴史は實に自念する人格の歴史であると云はれる。吾人の眞の生活は即ちこの實際に經驗し、眞に天地の美を見て自念し、其處に何物かを獲得するに到る迄進まなければならぬ。

さればこの自念生活にも何等かの形式が要ることとなる。即ち美を表現する藝術は人をして自念生活に導く形式である。殊に自然が表現する藝術、それは何人にも自念生活を経験せしむる大藝術の表現である。吾等が神を崇敬する時、其の時は必ず其所に無聲の自然歌を聞き、これに共鳴しこれに合奏するの經驗を持つであらう。

輕井澤の天地は其の生活を生活する者に最適地である、夏は殊に一年の中の最高潮の季節である故にこの時、この地を選んで斯く相互の間に一の空氣を作り、天地の美を讚美して形の外人工の外なる大なる世界を見出さんとの目的を持ち來つた所以である。此に到つて、人は、黙して自念するか、又天地のそれに應じて合奏するのみである。左に或る詩人がこの自然美を歌へる辭を紹介してこの心持を知る一助に供せん。

自然の纖手

太陽の閃き、星の流れ、月の出沒も奇しき大空よ

見渡す限りの穀物の曠野に吹き渡る風

靜かにひくき戦きの中に

あまたたび耐えつゝ、而も希望に輝いて

樂のさゝやきをたてゝ流れる。

希望と眞實に充ち、愛しつゝ憧憬しつゝ少しの休みもなく

幸多き玉蜀黍の莖の一本一本が靈の限り心の限りを捧げて働いて居る、

そは今、生れんとする若き客人の爲めに、何者の妨げもなき心地よき搖籃を彼の女の胸の上に織りなして。

微風そよぐ牧場には靜かに家畜が秣を食べて居る、

見よ、そこには隠れた愛の嵐が吹きわたり、一刻一刻、老いたる者は死んで行く

それ全く若き種を生まんがために、

沼に萌ゆる草、野にほゝ笑む花、多くの雜草、

すべてたゞ愛情をもて若き種を作らんがために。

見よ。立葵の白き花の毛衣を

聞け、小麥の穂の魂の中にクツクツクと小鳥を呼ぶ微妙のさゝやきを、

今は六月の陽うらゝかな其の時節である、

今は野にも山にも嬰兒の産衣を織り出さんと働いて居るその機である。

すべてを抱愛する夏の日

みどりの沈黙がこの夏の世界を被うて居る小さく柔き微妙を織りなす箴の音の外

おゝ、深き沈黙の世界よ

見渡す限り、いたるところに、それら一人一人の慈愛の母が、今生れんとする赤子のため

うたひつゝ、織りつゝ、働いて居る。

實に自然は美である。天地のもとを織り出す織手である。而してその美の働きの中には喜びが溢れて居る、それは喜びの中には憧憬と愛があるからである。吾人がそのよろこびを聞き、それに共鳴する事、これ自念であつてこの生活により美を眞に見る事が出来るのである。眞に神の心に通ひ、その神感をうくる事が出来るのである。眞に吾人が自念する時、吾人もその美の建設者なる事を眞に理解するに到るのである。

今又次の詩の意味を味はつて見よう。所謂無神論者が漸く神の世界を認めて行く所美はしき敘情詩を生むで居る。

偉大なる宇宙の建築者

見よ、私は天地の殿堂の建築者である、

永い間、暗の中に神を手探り

目に見えぬ世界の空虚な事を見破らんと嘲笑つた私

その私でさへ、今は殿堂の建築者である。

私は無明の世界に、命懸けに働いて居るこの肩をもつて

み空の下に大緑門を建てた

太陽は閃き、星はながれ、月の光は人を魅する

その青き圓天井の下に

明と暮とに燃ゆる柱をたてた

神を知らない私は、私の造つた宮殿の中に謙遜もしないで背高く突立つて

目に見えぬ暗の世界の神祕のある事を、
少しも恐れなかつた

たゞ、此の私の血管に太陽の光線が奇蹟の様に流れ入つて来る事ばかりをよろこんだ。

私は跪かず、恐れず、恥ぢず、

傍若無人に、侮蔑的な氣分を以て、大膽に、傲慢に、嘲笑して、

私の心の中には遂には神となるべき可能性が潜んで居るとの感情がながれ、私は宇宙の中心であるものゝ如く笑つて居つた。

私の宮殿の中には、歌聲、樂の音が流れた其處には實に不思議な、祈りよりももつと神聖な、もつと沈黙な何者かゞ存在して居つた。

私は又風の音、小川の流れ、鳥の歌を聞いた

嵐の叫び、雪のうめきを聞いた。

尙、私は私の心の聲をも聞いた。それは喜びの歌となつて高く高く上げられた。

通り過ぎた一陣の疾風は、氣紛れな樂師の奏でたオルガンの様であつた。

空氣の中に、木の葉の中に、雜草の中に、何者かのうごめきがあつた。

それは恰も會堂に敬虔の念を以て人々の動作する様に

しかしそれでも私は尙、私の宮殿に孤獨で突立ち、何の恐れをも感じなかつた。

時に突然、何者かゞ私の宮殿に侵入して來た

私は、こゝに初めて恐怖を感じた

そは嬌やかな、しかも速かな、青白い、淡い

恰も、劔の鋭い操の魂に、人間の鞆を冠せた様な

ギリシヤの月の女神の様に見えた

この時、私の誇りの宮殿は餘りに小さ過ぎる事を感じた

如何に遠い隅々にも

如何に小さき石垣の破目にも

神の現存に充たされて

今は全く孤獨寂寞の淋しきは消え失せた。

私は、そゞろに、恐しくなつて跪いた。

風の中に神今在すを感じた、

流れの中にその聲を聞いた、

極りなき雲の變化にその姿を見た、

それでも私はなほ

昔の様に膝を屈めずして、神在さぬを恐れは爲まいと努力した。

野生の花が揺り出して居る、目に見えない香爐の香の様な、幽妙さを以て神、今、こゝに在すとの感じがひしと心に浸みこんで来た。

私は、私の宮殿の圓天井を焼いた恐ろしい太陽の光から逃げだして

子供の様に闇の中に頭を匿した。

然し私は、もはや孤獨ではなかつた。

私が、盲目な、空虚なものと

傲慢無禮に嘲笑つた。その暗いかげに、何者かの動くのを覺えて

私は何となく、この不敬虔な手をその上に載せた

しかし私は、そこから、もしや光りを發しはしないかと、不安な思ひに震へ上つた、私は遂に神を見なければならぬか

神を見て、遂に再び又あんなに笑ふ事を、

止めなければならぬかと、

覺えず、戦慄した。

自念生活の領土(下)

— 美の兩極 —

前回には美の積極方面を説いたのであるが、尙一層完美に到達せんためにはその半面なる消極方面を知る必要がある。

それは何故世界に惡、不完全といふものがあるかとの問題である。これを究むるにあらざれば美の全極を知る事が出来ないのである。即ち吾人の生命が完全に、永久に發展する事が出来ないものである。吾人の人格即ち一の完全體を作るに最も深き根底をなすべきものは本能である。而して吾人の或る世界はこの淵源より生れ出たものであり、吾人の生活に缺くべからざる職分を持つて居る要具である。併し乍らそれと同時に甚危険なる事を遅くして居るものである。故に吾人が生命の奥義を究め、其の目的を完成せんとするにあたり、此の本能の研究を怠つてはならないのである。

この本能に二つの職分がある。即ち、

一、個人的有機體としての身體の發達、保存、再生の爲めの職能を盡す事。

二、個人の屬せる人種、人類の高き目的の機關としての有機體たる事

故に第二の本能、高等なる本能は生れつき備はつて居る人類の經驗と云ふべきである。即ち人類が幾萬年か繰返し經驗し來りし無數の努力と、種々の試み、——或は成功或は失敗等——の總てを綜合したその物を吾人が繼承したものである。此の廣大なる即ち數十萬に涉つた深き人類の經驗も未だ完全の域に到達する事能はず、宇宙の進化も人間の本能をも完全に成功せしめて間違はないものと爲す事が出来ないものである。故に吾人が本能の儘に動きその命令に

のみ運命を任す時は、必ずそこには一大事變に遭遇し、所謂人生行に難船を起す危険が有るのである。故に此の本能が一方に於て甚大切なるものであると同時に、又一方に於ては危険物であることを知らなければならぬ。さうして神は何故に斯る不可解なるものを人間に與へ給うたかをやがて了解するであらう。

▲宿命の世界 此の本能の世界を宿命の世界と云ふ、即ち先天的經驗の活動世界である。併し此の世界は宿命とは云へ人間の意志に依つてどうとも支配する事の出来るものである。即ち吾人が全人格を持ちたる經驗が時々刻々に擴大せられ深められて行くに従つて其の全人格が變化する故に、此の先天的經驗なる本能も亦時々刻々に變化し行くものである。故にもし吾人の中心點が正當なる位置に移り、人格に新しき更生を起す時は其の結果として本能も亦精練せられ更生する事は言ふ迄もない事である。こゝに於て本能も吾人の努力修養によつて改善發展することを信じなければならぬ。併し乍らスペンサーの言ふ如く、

『吾人は人工的科學によつて永く積み重ねたる本能より金の如き立派なる行爲を作り出す事は不可能なり』
と、これはスペンサーが人間の自由意志の存在を認むる迄に行かなかつた爲に此の固定したる本能世界に人間の手を入れる事が出来ないとした觀察であると思はれる。こゝに於て今私は此の部類に従ひ二方面の内容につきて説明しなければならぬと思ふ。

▲自我保存の意義 第一の本能の職分は自我保存にある。此の自我保存といふ事は、經驗若き人々には往々誤解を與へ身を誤るに到らしめる事がある。故に斯る危険なる所を注意し完全なる發展を遂げしめなければならぬ。近來我が國青年の思想に混亂を與ふるものはこの自我の觀念で、否、寧ろこの言葉である。一體自我には種々の形があつて、或は本能的自我、動物的自我、意志的自我、精神的自我等があり、或は又これを大別して大我、小我なども言つてゐる。この言葉の定義が不明なる故に矛盾の感を抱かしめ甚しきは自我保存といふ事を亂暴に主張して却て自我を滅

亡に導くやうな危険なる思想を醸す事があるのである。此の言葉の同意義に屬するものを擧げて見ると、自慢、自惚、我利、我意、自暴、自棄等がある。又これと關連してこれとは反對の意味の言葉には、自覺、自信、自制、自修、自重等がある。

以上此等の語を明瞭にしなかつたがために、今日あるが如き思想の混亂を來し、其の思想觀念に危険なる暗示を與へるやうになつたのである。さて以上の語を縮少して見ると、エゴイズム即ち我利と、個人主義といふことになる。然るに我が國では此の個人主義と我利とを混同して用ひて居るのである。されば今茲には殊に此の言葉の内容を明かにして置かうと思ふ。

▲個人主義と我利 エゴイズムと云ふ言葉の意義は、我が自我が狹隘なる自分の宮殿を構成してその狭き制限ある世界に齷齪して所謂物質界にある一時的の快樂を得て満足せんとする自我を云ふのである。

個人主義の意味はそれとは異つて居る。即ち内面的自我發展であり歸一に向ふ傾向であり、高尚遠大の目的の爲に不撓不屈、克己、奮勵を永劫に續ける自我實現を云ふのである。而して此の自我實現とは人格の歸一である。エゴイズムの云ふ自我は人格内の一分團と他の全體とが常に矛盾衝突を免れない自我であるが、この個人主義のいふ自我は、精神的抱擁の同情的寛容なる態度を持つる自我であるが故に、前者が排他的な態度であるのに反して、これは各分團の自我が精神的活動の出来る意志を訓練し、人と和し、社會と共同し得る品性を涵養して居るのである。即ち大我を實現せんとするの修養に努めて居るものである。ところがエゴイズムは益々人と相反駁し團體と調和し得ない自己を作る故に其の人の内部は益々混亂衝突し來つて宇宙の關係を理解しがたくなり其の大目的と共働し得ざるにいたるのである。故に其の人の爲す事志す事は一々失敗の結果に終る。これに反し自己修養により社會的自己を實現する時は其の理解は鋭敏となり、その人格は調和の美、圓滿の美を獲得するに至る。

茲に尙一言して注意して置かねばならぬことは此の圓滿調和といふことは所謂妥協臆病とは全く反するものである。而してこの自我保存とは單に身體の成長を意味するのみではない。いふ迄もなく精神の自我の發達向上をなすにあるを忘れてはならぬ。故に人間自身の社會的の病氣を根本的に治療せん爲には常に卑き目的を高きものに服従せしむべき修養を積むこと、即ち眞の教育の道によるより外はない。然らば何故に宇宙の善意目的は斯る危險物を人間生活上に與へたかとの問題が起つて來る。この説明は即ち人格主義を研究する時に至つて満足なる解答が與へらるゝであらう。

▲三つの世界の關係 前述の如く人間の世界には、宿命、意志及び神の攝理の三世界があるが、この神の攝理即ち神意の世界が即ち人格の世界である。更にこれを言ひ換ふれば、人間の意志世界に存在するものが即ちそれである。こゝに人間の意志の價値があり根底が存するのであつて、若しこの意志世界が假りにないものとする、人間は全く生くる甲斐なきものとなり神意も亦所謂宿命の世界に支配を受くると等しきものとなつて人々はたゞ人形と同様に運命の世界に生死するものとなり終るであらう。意志の世界こそは宿命世界を開拓して行くものである。のみならず神意の世界も又自由に選擇することが出来るのである。併し又人間がこの自由を濫用する時、其處には必ず矛盾を生じて來る。それ故人間世界には道德的義務と責任といふことが生じて來るのである。されば此の自由意志ありて初めて人生の劇、人生の詩將宇宙の美も獲得することが出来るのである。若しこれなき時はそれ等は皆淺薄なる見解となり、人生の深き興味も喜びも勿論湧き起るものではない。即ち此等は皆人生の強き戦ひや憂苦の後にその奮闘の勝利者の頭上に置かるゝ故である。この意味に於て人間の自由意志にも制限があるものである。換言すれば宇宙の意志には反すべからざるものがある。故に其處に教化をなしこれによつて漸時進んで行かなければならない。而してこれは各自の瞑想生活によつてその進路を開く所の鍵を得る事が出来るのである。

▲ポーロの敷き 尙こゝに吾人の經驗に合せて適切な問題がある。即ち吾人の經驗中には時に修養の高潮に達し、更生の經驗を味ふ、その時は實に喜悅に満ち恰も暗夜に光を得たるが如く沙漠に綠地を見出したるが如き感に充たされて非常なる満足の状態に在る事がある。然し其の感情は須臾して消え再び闇黒の世界に來り失望困難に遭遇する。斯くて曩きに拭ひ去り又癒えたりと思はれた心の疵が再び現はれて來るやうなことがある。即ち非常に高潮に達し全人格の調和したる氣分に満ちて居つたあとに從來の卑しき我、卑しき動機が頭を現はして來るのである。

こは何故であらうか。自分が經驗した喜びは間違ひであつたか、將迷ひであつたかとの煩悶が起つて苦しむのである。即ち自分の内なる心の望むものと湧き起つて來る所のその問題とが矛盾衝突する。こゝで人知れず煩悶するに到るのである。實に斯る經驗は何人も幾度も繰り返すことである。

彼の燦爛たる人生の光輝を有したポーロもかく言つて居る。

噫、吾は惱める人なるかな、なやめる人なるかな、

と。此の惱めるものとは何であるか、自分の理想に對し意志に向つて劣情の起るのは何故であるか、實に人間の本能である。我等人間の祖先代々が失敗し來りし其の卑き經驗が時々吾人の隙を覗ひ、危険なる頭を擡げるのである。もし斯る時あまりそれに拘泥し苦しむ時は遂に又如何ともする事の出來ぬ迄に墮落に陥つて了ふ事がある。故にこの吾人を惱ますものゝあることを豫知してこれに捉へらるゝ事なく速に高きに向つて進む事が大切である。即ち本能を精練し如何なる際にも自念し能ふとの自信を以て進む事が肝要である。

▲至上人格 吾人は又如何に完全なる生活を遂げ、己れの責任を盡し此の自由意志によりて吾人の力の限りをいたし、正を踐み邪を却け、犠牲奉仕の生活をなせるにも關らず、禍起り來り遂には死に呪はれる事がある。これ實に吾人の自由意志と雖及ばざる所である。この時に於て果して吾人の上に無限なる至醇の人格ありやとの問題が起つて來

る。然し又吾の一面には斯る問題が如何に吾人の頭を悩すとも天地の大原因を無目的、非人格なるものとして満足して居る事は吾人の精神自我が許さないのである。實に吾人は我が頭上に憂ひの雲が襲ひ來り、不可解なる問題に出逢うとも、その奥に必ず希望を以て考へるといふことは人間の誰れの経験にも明かなる事實である。或は又吾人が如何に無私の心を以て世の爲め人の爲めに盡すことでも世人はこれを誤解してさまざまに非難的とされる事もある。けれどもそれは決して悲しむに足らない。それは即ち吾人にとりて必要缺くべからざる修養であるといふ事が後に至つて理解さるゝ時が來るのである。即ち自由意志を鍛へ上げ、益々輝き價值ある人格に向上するために、斯くの如き緊張努力がなくてはならないのである。即ちこれこそ深き美、無限の愛に活らき、最價值ある人格的世界に至らしむべき人生の試練である。

▲心の訓練 實に吾人の憂ひ悲しみ、病氣死亡等が人格發展の爲めに又自我訓練のために如何に益をなすものであるかの事を悟らない時は、人間は遂に暗黒世界より脱する事が出來ないのである。而してこれは多くの實例もあり、又吾人の冥想によつて直感する事も出來るのである。然らば吾人人格の完成に何故訓練が必要なるかとの問題が生ずるのであらう。これは吾人の経験が説明して呉れる、即ち吾人は斯る目的の爲に苦しむ事が寧ろ愉快でありそして満足有して居るのである。言ひ換ふれば吾人が目的に到達せんとし努力する、此の努力こそ實に人生にこれ以上の價值はないのである。故に永久の生活をなすものは、人に認められざる事又社會が反對する事、他より迫害を受くる事を意にかけないのである。ポーロも『無價值なるわれ等の人生を棄つる事は恰も弊履を脱ぎすつるが如し』といつて居る。この感は實にポーロのみではない誰か無價值の人生にたゞ蟲の如く生き長らふることを望むであらう。歴史に残された人生の深刻なる美偉大なる價值を味ひ得たる人々は多く罪なくして犠牲となり、人の爲世の爲に献身奉仕して而も理解なき世俗の爲に遂に迫害に逢ひたるが如き人格者に依つて飾られて居る。——又近くは正義の爲に戦つて居

る人々の如き皆それである。——而も其の期に際し尙感謝と満足とを以て勇み進んで居る人々の人格を考へ見る時、吾人は實に人生の眞の價値の奈邊に存するかを學ぶことが出来る。其の深き經驗即ち世を救ひ世界の文明を指導し、國際的病根を治療せんが爲に命を捧げた偉人がその死に際して感じた幻想は實に燦爛たる輝きをはなち、其の喜悅云ふべからざる高潮に達した事實は疑ふ事が出来ない。こは高尚なる人間道徳の價値は人間の意志と神意との融合したる世界に於て現るゝことの事實である。或詩の中に次のやうな言葉がある。

死は樂の音の調子にさも似たり、そは高尚なる貴き旋律の高まりしに過ぎず、

と。實に人生の價値は其の壽の長きに依るものではない、たゞ其の最高の目的を實現する事によつてのみ定まるものである。

ゼームスは言つて居る。

人間の幻想は其の人に就きての偉大なる事實である。

と。即ち其の幻想は其の人格であり、實に其の人の哲學は其の人の性格の發表であるといふのである。總て宇宙の定義は人間の性格が其の宇宙に再演せられたものに過ぎないのである。故に人間の頭にて見たる宇宙に就きての考はその人の品性を現はすものである。こゝに於て人生の深き問題の鍵は自分の人格に求め得らるゝのである。

人の意志と宇宙の意志及び宿命の三つの關係の歸一する事を了解しうるならば茲に人間の關係も亦歸一するに到るのである。この境涯に到るには先づ吾人の内面生活の充實といふことを考へなければならぬ。この時に瞑想は吾人に最も必要な修養生活である。

左に瞑想の心持を詩に依つて表はされたものを掲げてこの參考に供することゝする。

○異郷にさすらふ魂の祈

おー、計劃經倫をなすものよ、星をなげ出し、美を描く建設者よ、理想想像を生み出す者よ、

この廣大無限の空間に、最も小さき者の如く、私はしよんぼりと佇んで居る、
そは寂寞な異郷に流浪ふ旅人として

こんな小人の様な私は

今、痛ましい、小さな聲を張り上げて、無二無三に喚く、

噫、しかし、そは空しく、何の應へも與へられずに終るのではあるまいか。

おー、汝、聞き給へ、

この悶えの中に歌はんとする切なる祈りを、

この惱みの中に、私を永く躊躇はせ給ふなどの祈りを、

私が永久に生きんがために死の恵を賜へとの祈りを、

汝の慈愛の劍をもて我が肉の手がせ足がせをさきやぶり、自由の世界に私を放ちたまへ、

私は汝の身うちではないか、

私は汝より出た一部分ではないか、

汝の大洋の小さき入江にうごく一つの漣ではないか。

なさない、慘めな、日の暮れがた、朦朧として不明なその曉方、どんよりと朧な月の夕べ、

木の葉が、芽ばえ又散り失せるそれらの現象の世界に、

私は何のかゝはりがあらう、何故、私は永い年月の間、

この足に、涙を以てあかく錆びついた、鐵の鎖をひきずつて、歩かなければならないのか、

何故、私は飛ぶ爲めの翼をもちながら、

こんなに匍つて居らねばならないのか、

見よ、大いなる翼あるものよ、汝の子供を、

これ即ち、私である、

時には私も、この塵にまみれながら、

頭を擡げて、どうか歌ひたいと努力して居る、

どうしても私は歌はなければならぬといふ心にはげまされて、

すべての者の成長の奇蹟が、私の周圍をとり巻いて居るではないか、

あゝ成長の奇蹟よ、

光、音、形、動搖、

縦に向上し、横に擴り、森羅萬象の天地の祈り、沈黙のねがひ

あゝ妙なる奇蹟よ、

私はたゞ肉體ばかりの無價値なものではない、

動物的な空虚なものではない、私はずつと抽んでた

もつと勝れた者である事を了解する。

私はこれらの青々と育つて居るそれらの意味も、

希望に充ち、上に上にと向上し、熱心に發展する蔦かつらの意味も

これら、一つ一つのものが、憧憬して止まず、それらの纖維が、如何に緊張して、太陽の光りを慕へるか、私にはすべてがよく了解しえられる。

私はこの手を、健全に萌えたつ雑草の上のにのせる、

漠然とした望、朦朧とした目的に生きて居る、この草でさへ、閉ぢ込められたその殻を打ち破り

その芽は土地に匍ひ上り、

露と光とをうけるではないか、外に擴り、生命を信じ、成長して止まないではないか、あゝ、

これらは、私の同族である事を知る。さうして、希望は徳であり、疑ひは罪なる事をも知る、

おゝ、私の頭上には、共鳴して歌はんとの渴望が被うて居る、私は聲を上げる、

しかし、又私は躊躇ふ、

永く過した無言の年月、咽喉のいたんだ幾多のよるひる、

その沈黙は歌ふことをゆるさない。

それでも、私は、一層聲をはり上げる、

人にも聞いて貰へない、調子はづれの叫びをあげて。

おゝ、見よ、かつては歌つた汝の子供を、そは私である。

この私の魂が、奇態な、惨めな牢獄の中で

私が、その決勝點に向ひ、意氣こんで驅ける速さを、失ひはしないだらうか、

噫、なやめる私よ、

この、憎みと、情慾の熱に、燃ゆる様な私、何の意味なく調子なく、たゞ騒々しい音である私、
噫、なやめる私よ

肉體の罪にて惱める魂の希望なき私、

私はこの牢獄の中にて、

昔、先祖が見たその夢を、屢々くりかへす、そはこの心のいたみが、罅となり傷ついて居る、乾いたコップの様な私を、塵をもつて充して來る、

そは、人間の目も聲も届かない太古から、虚榮を以て色どつて居る死の榮光の紫の衣で包まれて居る、

しかし、私は

いつでも、いつでも、この塵の檻樓を纏つてのみ居る者ではない。

私は、私の目的に向つての躊躇、彷徨の中から、再び甦りたいと、希ひに希つて思ひ煩ふ、

けれども、決して

この惨めな、塵より生れた苦痛から逃れたい爲め、たゞ盲目滅法にわめいて汝をさがし求めて居るのではない、
そは、私は運命についての遠い叫びを聞くがために、

あゝ、最も遙かな太陽の彼方から、歌ふこの運命の聲が聞えて来る、
さうして、私は苦しみと、悶えの中に、あかき鎖に縛られたまま氣絶する、
あゝ、私は起上つて、走りたい、

おゝ、計劃經綸をなす者よ

星をなげ出し、美を描く建設者よ

理想、想像を生み出す者よ。

活動は人生の歡び

—宇宙殿堂の建設者—

扱次に進むべき問題は、以上感じ味ひ來りしところを行ひに現はし意志の生活に到らしむる事である。即ち自然的發動力を理想目的に向け、發露し活動せしめて進まなければならぬ。然らば吾人の理想目的とは何であるかを明かにする必要がある。其の目的とは實に眞理に浮ぶ大觀であり、宇宙の實現せんとする大目的、宇宙の殿堂、宇宙の人類の永久の住居たる王國の建設である。吾人は殿堂建設者である、天地の文を織りなす機織である。勞働者である。夜も晝も夏も冬も、永久に意識的に將無意識的に、喜び歌ひつゝ希望に充ちて働いて居るものである。かくして働くと云ふ事はこれ自然の總てによつて示されて居る通りである。例へば彼の蟻や蜂を見ても如何に其の天工の妙なるかを知る事が出来る。彼等數萬の種族は各自が日夜に勞働して其の子孫存續のために、又己が食物の爲に絶えず働いて

居る、これひとり蟻や蜂のみではない、すべてこの自然——鳥も蟲も花も木も——皆織手として建築者として、新しき客即ち愛する後繼者の爲に働いて止まないのである、而して此の働きの中に喜びを見出し、愛の活動を生ずるのである。

實に、愛は目的の眞髓をなすものである。此の宇宙は神の手によつて作られたものであるとは云へ、決して神の働きのみではない。其處には必ず人間の働きが加はつて初めて完全なものが創り出されるのである。人間は意志の世界に働いて居る、それは絶對意志と調和し、大目的を實現せんがために働いて居るのである。斯くして自然は天地の美を現はすものである。美とは即ち調和である。調和とは即ち精神の調和、人格の調和である——かつてこれを物質の調和と見たのは皮相の觀であつて、眞の調和は決して此處に求めえられないものである。——

▲中心は善意志へ 天地萬物の働きの中心は善意志にある、あらゆるものは相互に憧憬の念を以つて相互に奉仕し、相互に犠牲の精神に充ちて道德的に働いて居るのである。此の人類の働き、自然の共働、宇宙の永久的震動はとりも直さず理想的殿堂、理想的宇宙、理想的王國を建築して居るのである。——茲に殿堂といふのは宇宙のすべてのものが此の中に住はんがためである。吾等はわが住家を定め又國民としては國家を作り、人類が世界を住家とする如く、宇宙のあらゆるものは宇宙そのものをわが殿堂として住はんが爲に永久無限に建設しつゝあるのである。——

さらばその殿堂とは——或は實體とは天が造つた宇宙とは、又社會とは、國家とは、宗教とは……何であるか、世には常識的見界を以て所謂固定した儀式、制度、領土、財産、建築物の如きものをさしてこれを國家といひ、社會といひ、又宗教といひ、宇宙といひ、實體と見る習慣もあるが、それは眞に物を見る事が出来ない人間の皮相の觀である。例へば實在を現はすものが自然の現象であつて、この現象を拵へたものは無現象であるといふのと同じである。甚しきに至つては眞髓を空なものとし却つて人間の拵へた皮相を眞なる物と見て居るものさへあるが、これは實に大

なる障害と云はねばならぬ。

▲人格を以て織りなせる宇宙 人間の言葉にて主観客觀と云ふ概念を作つて居る、此の主觀とは自我の本質、客觀とは自分の住居境遇對象物である。これを人間について言へば我は主觀汝は客觀となる。——此の兩者の研究は言葉の研究であるが、言葉と實在とは決して離す事は出来ない。故に先づこれより始めなければならぬ——此の言葉の存するのは吾人と其の住居我と汝は共に、實在である所以である。吾人の境遇は吾人を保護し生を保存し目的を遂ぐる條件となり、又吾人を養ふに必要缺くべからざるものとなつて居る。併し此の境遇を物質の如く考へる事は誤つて居る。此の四圍の境遇は吾人の一部分であつて其の住居宮殿と稱するものは人格の關係によりて作られた目に見えない建築物である。實に人格を以て作り組合せ織成した實體こそは永劫の吾人の殿堂である。即ち社會、國家、宗教は皆人格によつて成立つて居る。

而して其の人格の組合せより起る習慣が吾人の目に見ゆる世界となつて現はるゝのである。ここに於て人格は内と外との二方面に分れ即ち内なるを人格、外なるを對象物四圍の境遇といふことになるのである。即ち内なるものも人格であり、外即ち境遇も亦人格である。されば宇宙は實に人格と人格とが組合せ織成されたものである。此の人格的關係が道德であり、此の關係の働きが意志である。これを説明するに最適例であると思はれるものは彼のフリーメイソンの建設である。

▲フリーメイソンのフリーメイソンの目的はソロモンの宮殿を建設するといふことである。ソロモンの宮殿とは即ち宇宙の人格的宮殿といふ意味であつてこれを造り上げる石工は即ち各自の人格である。石とは即ち我が人格である。この我が人格はソロモンの宮殿の石の一塊である。これを修養し精練し行くは宮殿の良材となるべき爲である。而も己れは石にて、且つ働く即ち人及び己れの人格を刻み上げ積み上げる石工である、尙其のフリーとは自由の

意味を表はすもので、實に神意のまゝのみにてはなく自由意志にて働くといふ意味である。

尙このメーソンの働きに興味を惹くのは、神祕的團體なる事である。即ち内の世界を作るものなるが故にその關係が根本的にいたり目に見えない宮殿を作り、互に働き合ひて道德的關係を保つことを目的とするもので、この神祕的にて而も深き目的を有する所に此の團體が非常に興味ある所以である。

又此のフリーメーソンの働きは國際主義であつて國家と國家とは兄弟姉妹となつて眞の歸一に至ることを期して居る。若し人あつて『眞にそれは出來べきか』との問に對し、彼等は『然り』と答へる。現時の多くの宗教家は出來ざるものとして消極的態度に甘んじて居ることに彼等は出來ると信じ、且つその自信を持つのである。

▲人生の理想、目的　フリーメーソンのこの自信も何故に今、實行する事が出來ないかといふと、そはいふ迄もなく從來の我儘、即ち人工的にそれらの働き人を壓し來つた事に原因を有するのである。されど現時は漸く心あるものが眼を覺して眞に人生の理想、世の理想は働くといふところにあることを悟つて來た。

見よ宇宙は大目的の爲に働いて居る、此の働きに人間の價値が生ずるのである。從來労働といふことを賤しめ來つた所謂金持も今は其所に目を醒さねばならぬ時になつたのである。從來の如く坐食して何の勞をも執らざることを以て得意として居る者はとりも直さず自分の造つた狹隘なる牢獄に閉ぢこもつて満足して居るものであつて、決して永久の理想の殿堂に到達する事は出來ないといふことを知らなければならぬ時が來たのである。

此の奥義は人生及び宇宙内の總ての事實に現はれて居るものである。吾人の意識が主觀客觀に分れて働いて居るといふ事を以て考へて見る時は其の眞相を明かにする事が出来る。然しそを考ふるに際し、先づ古き思想の習慣を破らなければならぬ。即ち前にも述べた如く現象とは常識にて考ふるが如き表面に現はれたものではない。それは客觀的眞理であり、實在であり又吾人の境遇であることに心を働かしめなければならぬ。即ち他の人々は私の境遇であり、私

は他の人々の境遇である。此の關係にて作つたものが吾人の國であつてこは人格世界である。此の關係を明かにせんために今吾人の世界を三方面に別つて見ると、

一 無意識心意に屬する境遇——即ち普遍的世界にて未だ自分化せられざる所である。即ち無意識なる境遇、祕密なる所であつて、その中には或深きものを有すること、——

二 潜在意識の心意に屬する境遇、世の潮流及び人類社會に共通なる氣分が吾人の意識無意識の間に存すること、——
三 覺醒せる意識に屬する世界——である。

吾人の意識心意は主觀、客觀の兩方面及び無意識の間に共同して働き合はうて居るものを云ふのである。故に吾人にとりて最も價値ある經驗は此の三種の境遇が等しく働き其處に調和共働を得たる時に實現せられたるものであつて、此處に深き奧義を有するのである。此の無意識世界とは宇宙の事である。これを現象界にとつて例へて見ると太陽の光線は吾人の無意識界より來て居るものである。即ち感應はあるが、それが何處より發し、幾萬年を費してこの地球に達して居るものであるかは實は誰も知ることが出來ないのである。

又潜在意識は、例へばこの地球を取り圍む空氣の如きものである。吾人は風あることによつてその存在を知覺するけれども實は吾人の知覺しない所にも空氣は充ち／＼て居つて、今吾人の身邊にそよぐ風もその起り來る所はそも何處よりか、唯、風の波動の源は遠きにあるといふことを知るだけである。意識は又この土に生ふる木を以て例とすることが出来る、木は土に根を張り其所より養分を吸収して生長して居る、土と根と離すことは出來ない。けれどもこの木の生命を養うて居るものはその根の張つて居る所が限りではない。根の及び至らない所からも木に送つて居る生命はどれだけ廣い範圍であるかも知れないのである。又木は天に向つて枝を張り葉を廣げて生長して居る。けれどもこの木の生長はいま眼に見える幹の限り枝の限りがこの木の限りではない。根は限りなく深く地中に、幹は限りなく高

く天にその關係を保つて居るのである。けれど吾人の意識界は例へばその根の限りと、幹や枝の範圍に在るのである。

尙これを吾人の日常生活に於ける經驗により考察して見ると、吾人の經驗の中には先天的なるものと後天的なるものがある。先天的とは無意識世界を云ふ、吾人の生活はこより來る事が多い。併しそれは分らない故此の世界を價值なしと考へるのは人間の淺薄なる習慣によるからである。

次は活動行爲の方面であるが、自分と境遇との間に如何なる反應と關係があつて吾人が發展して行くかといふと、その動機及目的は何れも道德的意志的である。即ち宇宙の善意志の働きに基いて行くのである。これが人間の感情に表はれては愛の經驗となつて來るのである。

さてこの愛、又は道德關係は、決して己れ一人にて生ずるものではない。實に吾人の生活は相互的であり、客觀的人格の空氣があり又團體が存して居る所から成立つものである。そこで吾人が行爲を現はす迄にはその前に先づ知ると云ふ事が大切なこととなつて來るのである。即ちこれによりて判斷し此處に基いて行爲が生ずるものである。それ故吾人の人格は先づ識る者であると言はなければならぬ。意識は——知る、知りたい、知りうるものとして——知るといふことにつとめて居る能動的なものである。けれどもこれは主觀的、客觀的なものでなければならぬ、即ち相手に照して自分を知る其所に此の兩者が働き合つたその結果から、思想知識が生ずるのである。即ち知識には知るもの、知らるゝものとこれより出でたる眞理と、此の三方面がある。知るもの知らるゝものゝ間に同意があつてこゝに活動が始まるのである。

▲人格の三位一體 前に述べたやうに吾人は働き手、建設者、考ふる者である。こゝに相手がなければならぬ。即ち客觀的事柄がなければならぬのである。働き手があつてこゝに初めて行爲があるのである。この三位一體の一を缺

くときはそは疊の上の水練に成り終つて了ふ。此の三者は即ち知、行、愛（信仰）の三位一體といふことも出来る。而して單なる客觀は人格であつて、此の人格の團體即ち結合した人格もて複雑に混成したる終局が宇宙の人格である。

以上述べ來つた如く、吾人の境遇は感ずるもの、關係を知るもの皆これ人格である。（この人格といふものは心意的狀態を離れ意識より獨立して生存するものではないといふことは茲に更めていふ迄もないことである。）さうしてこの人格の秘訣ともいふべきは内なる自己に驚くべき發露の力を有する事である。これは客觀の複雑なる境遇より來る共働の力が震動して起るそれである。恰も、磁石の力に感じて起る生きたる電線のやうに、内なる力は客觀の力と相感じ相喜びて共働するに到るものである。人格と人格の震動に於てはそこに道德關係が結びついて、これが意志となり又力となるのである。即ち吾人の境遇たる無意識世界は無意識狀態でありそこに動く原動力は良心の動搖である。此の三つが調和統一して成つたものを吾人の性格の進化發展といふのである。さうして吾人が殿堂の建設者であると云ふのは、この三つの世界を調和統一して永久の自己の人格の住居を作る事である。

▲人格結合の原動力 此の建設のために有効に働く事を人間社會に於て道德と云ふのである、其の原動力即ち此の建設に缺くべからざるもの、即ち人格相互を合して大なる理想的團體、世界的境遇を作り、材料と材料とを結びつける力となり、其の働きに効力あらしめるもの、これを愛と名づける。この力は人生の根本動機となつて居るものであるが、これは複雑なる要素より成り立つものなるが故に其の内容を見る事が困難であり、従つてこの力が誤用濫用せられ、愛の概念に種々なる間違ひが入り交つて居るのである。茲に於て吾人が目的に向つて突進せんとする場合、人も欺かれ、自分をも欺く事のあるのは、愛と云ふ動機が濫用され、その意味が誤解されて居る所より來るのである。要するに吾人の問題は今より目的の殿堂を建てんとするに當り、その建築は石の上にか、砂の上にか又其の材料は

草にとるか木とするかであつて、これを靜かに考へて其の起工を爲さなければならぬ。此の時に當り茲に用ふる言葉の意味についても、その定義を充分に明かにして言葉より生ずる誤解をさげなければならぬと思ふ。

▲愛といふ言葉の意義 即ち愛と云ふ語は人間の動機を現はすに當り、最も屢々用ゐられるものであるが多くの場合は濫用されて居るのである。此の語を現はすに種々あるが、此の意義を大別すると相反したる二つの傾向となる。其の正しき意味に於ては、吾人の狹隘なる我利的思想感情より脱し自分の本質を擴大する事である。誤りたる意味に於ては以上と正反對の傾向即ち財産、所有物等と云ふ兩意義を結び付けたる我利的傾向を助長するために用ゐられて居る。此の狹き我利的愛を現はすには寧ろ好み（アフェクシヨン）と云ふ語を用ゐた方が妥當して居る。愛の正當なる意義は「孔子の仁」「釋迦の慈悲」「基督の愛」といふ意義實にこれである。最崇高なる情緒情操を現はす文字であつて彼の世俗間に用ゐらるゝ意味の愛の如く、自黨、自派を固守しその黨の人々のみ姑息なる忠義だてをなし、徒に己が團體を辯護することを以て愛の強さに用ゐらるるは大なる誤りである。

愛といふ言葉の表はず眞の意味は實に永劫不易なる眞理に對し、敬虔なる態度をもち大目的に献身奉仕する事、これをこそ愛と言ふべきものである。

愛の生活

▲愛の言葉濫用の弊 愛といふ言葉は種々なる意味に誤用又濫用されて居る。その中にも執着戀着と云ふやうな言葉は最多く此の愛と混同して用ひられて居るのである。いふ迄もなく執着、或は戀着などといふ言葉は多くの人の例にある如く、一人の友又は兄弟等に對するなど其の對照が一人の人又は一部分に對する自己の情愛であつて、其の情が厚ければ厚いほど利己的偏愛となるものである。然もこの情は必ず感情の強く執着する場合のものであつて、この場

合は又必ずその感情にも意志にも自由を缺き、自己が自己の感情意志に制限を加へて來るのである。即ちそれは偏愛であることを免れない。然るに眞の愛といふ語に含まるる意味はこれと異つて常に徹底的、普遍的、抱擁的であらねばならぬ。然るに、此の場合の愛といふ意味は自分が愛せらるゝものに隷屬して居る状態、及び他人が自分に隷屬して居る者なる事を示すもので、即ち支配せられ又支配せんとする利己的制限が含まれて居るのである。一體人間といふものは人を感化すると云ふ事を好むものであるが、これは全く己れの戀着の情、すきこのみの情を以て我が愛するものを專有物の如く支配して行かうとの意を有して居る。故に嚴密にいへば我が家庭、我が友、我が家族、又特別に自分の專有して居る物品とか又は人とかその仲間その團體親戚等に對した場合の情をいひ表はすにこの愛といふ言葉は用ひられないわけである。然るに多くの人々は多くの場合この執着戀着といふことを以て、此の愛といふ語を用ひて居る。この故に愛といふ言葉に就ては種々雑多な意味を含ませて、或は間違つた思想を醸すに至るのである。前者の場合の如き愛の對照物は實際に於ては我が專有物であるべき筈のものでないにも關らず、我れ獨り愛せんとし、又愛せられんことを欲するものである。が、斯の如き利己的感情がどうして神聖純潔なる愛の實現を見ることが出來得やう。實に此の中には我利執着、偏頗の情のわだかまるのを知るばかりである。この種の心理状態が如何に愛といふ意味を誤用し、如何に混雜なる思想を引き起して居るかに就ては人々各々の經驗に就て反省して見れば明かなる事であらうと思ふ。

專有とは意志なきもの、即ち物質的のもの——品物又は領土などの——に對して用ふる言葉である。故に此の專有を欲するといふことは物品等の所有權を欲する場合に用ふる言葉であつて、此の經濟的思想、宿命世界の考を以て人格を有する者に適用せんとするは、つまり言葉の濫用である。即ち愛といふ言葉の中に此の專有の意味を含むものとすれば、人間を土地領土と心得て支配せんとすると同じことである。又人間が與へられて居る自由意志を以て勝手

に人工的に爲すといふ事は即ち意志濫用である。今日多くの人が考へて居る所によると、成功は財産を殖す事であつて、これが人生の幸福で價値ある事であるやうに考へて居る。此の習慣が人間の思想の凡てを支配してその人格に對して迄も及ぼして來て居るのである。即ち自由意志の人間を財産と混じて己れが用に供するに至つたのであつて、古くは此の思想よりして彼の奴隷賣買の如き事件をさへ歴史上に止めて居るのである。

▲神聖を保ち得るもの幾何ぞ 夫婦の愛といへど多くの場合は男子は女子を己れの所有物とせんとし、女はその愛を専有せんとして互に執着心を以て相對するものが多い。此の卑屈なる妥協的愛とも名づくべき現象は夫婦の間柄ばかりではない、人間はありとあらゆる關係に於て或は友人間又は仲間に對する場合もこれを我が物としなければ止まないものである。然も亦その一面には醉生夢死の生活に入つて居る人間は其の間違つた愛の魔力にうたれ、又はその卑屈なる手段に氣付かず其所に誘惑され、妥協をも敢てしかねまじき情性を持つて居る。否正邪曲直を辨へず一時的利己心に驅らるゝ人間には、この妥協に陥らんとするの誘惑は屢々起るのである。故に餘程の努力を以て戦はなければ終に操を賣り我が神聖を汚し、我が人格を無視し、自ら卑屈者となるの止むなきに立ち到るであらう。眞の愛といふ言葉の示す意義は如上の如き我利的狹隘なる考より脱して、初めて眞に味ひ得らるゝものといふべきであつて、茲に到つて宇宙に對する愛といふことも始めて感じ得るのである。其處に眞の生命の實相を見、生命の根底に觸れて普遍的愛に到達するのである。

茲に於て從來の間違つた考、即ち相互に分離排斥する諸種の傾向、又は一分團と一分團とは到底相容れざるものであるとの暗示、即ち相互の心や身體が孤立して居ると云ふやうな間違つた考を讎して眞の歸一の土臺を見出し、始めて人、家庭、國家、學校、社會等の世界の關係に對して眞に愛の行爲をなし、愛の動機を自由に活かしむることが出来るやうになるのである。此の眞の歸一といふことの意義原理を知らなかつたならば、必ずしも部分と部分は一一致す

るものであるといふことを信ずることが出来ないであらう。又此の歸一に入らなければ吾人は互に一の團結をつくる事は出来ない。況して國と國とが相和し人道のために共働する事國際的道德を成立せしめ世界的の精神空氣を作る事は出来ない。然して、實に此の總ての事に共働といふ事がなかつたならば愛の實を結ぶ事は出来ないのである。

▲自由の獲得　吾人は人間の痼疾的習慣ともいふべきこの人格を物質視すること、即ち人格の結合を經濟上の財産の所有權の如きものと考へ、それが爲自ら制限を作つて互に利害衝突し、常に反目し相争ひ排斥することより脱して、眞の人間の自由を獲得するに到らなければならぬ。併し其の脱出する事は又實に永き間に積まれた、堅牢にして然かも無形の自己の牢獄を破るのであるからなかく困難な事である。否自分自身が既に制限せられた愛を以て、自分の主人としてあるのであるから、此の根本を改めるといふことは容易なことではない。併し之は先逸早く此の習慣的制限を見出して自らこれを打ち破らなければならぬ。然るにかゝる制限を人格の上に加へ、人又は團體を利用せんとし、これに反對するものを敵として憎み嫌ふなど、云ふが如きは實に最も憎むべき、我利的根性を發揮したものと見なければならぬ。吾人は斯る態度に妥協する事は出来ないのである。若し妥協するが如き事あらば、實に此の貴き操を賣る卑屈者と言はなければならぬ。斯くの如きは正義に敵し善意に逆ふものといふべきである。而して斯くの如き者に決して眞の愛を見出し、偉大なる人格を見出し、精神の内に燃ゆるが如き情諸情操を感ずる事は不可能である。此の間違つた考はひとり友人家族の上ばかりではなく、大團體大國家、否、無我愛を標榜する宗教界にさへもあるのである。現に歐洲大戰の大根源も此の制限的愛と名づくる我利心が他を排除せんとするより起つたものである。吾人は國家又は宗教等に對してもその實を持たないものに對しては、決して愛といふ眞正なる言葉を發してはならない。狭き愛は決して眞の愛ではない。狭き宗教心に捉へられる人は決して眞の宗教に入つたとは云はれない。狭き愛の中に生き、狭き宗教に行く者は微妙神聖の假面の中に隠れて、寔は神を見遁して居るのである。斯の如き思想傾向にど

うして妥協する事が出来やうか。

が此所に一言して置かなければならぬことは、然らば既成宗教は要なきものか、又吾人の徹底的愛とは親子兄弟友をも捨てよといふものであるかといふと決してさうではない。聖人君子の所謂「我れに従はんとする者は親子を捨てよ、兄弟を捨て得ざるものは我れに來るを得ず」といはれたのは、これは一寸聞くと恰も親兄弟を捨て自身一人孤立せよといふが如くに聞えるけれどもその眞の意味は親子兄弟夫婦の執着、戀着を棄てよ、廣き我れに立歸りて來よといふ意味である如く、茲に所謂我れ等の理想の愛は實に偏愛偏狹に陥らんとするもの、利我卑屈に妥協せんとする制限的愛にはどこ迄も反對しなければならぬといふのである。宗教に對する見解も同様、此所に着眼するときは即ち既成宗教といへど生命あり眞理あるものであるといふことが出来る。

勿論此の普遍的愛は無制限徹底的のものであるが、これが體現する場合は單に特別な個體に於てして居る。即ち親子、友人、學校、社會、國家等吾人の日常身邊の複雑なる間柄に於て起ることはいつの場合にも同じであるが、この普遍的愛を以て接するならば其處に何の制限もなく、而もその純潔なる愛は永久より永久に亘つて衰ふことはない。此の愛に至るには如上の複雑なる關係を知り、然して靜かに冥想して大宇宙と我れと相合體し其所に歸一するの經驗を得て始めて此の愛を経験し得るものである。

宗教上より説く神の愛といふ言葉にも種々誤解されて居るものが多い、例へば「一己の神」といふ事に就ては、一己の神と稱するは至上の神ではないのである。即ち猶太の宗教の如きはこれであつて、ユダヤ人を選民といつて他を排斥したのである。こは我が宗派我が教會として我が爲にのみ神を呼び救ひを求むるといふが如き、偏狹なところより來て居るのである。カイゼルの夢は「吾れは神の僕であり獨逸民の選民である。故に獨逸に逆ふものは神の敵である」と見て居るのである。これ實に狭き愛の專有者であつて、神をも我が專有と見做して居るのである。斯か

る神は天地の神ではないのである。眞の神は決して東洋西洋といふが如き區別はないのである。つまり物質的制限を加へられたものではない。昔は皆民族的宗教であつたが爲にそこに區別をたて、従つて人格をも神をも區別するが如き思想があつたのである。

▲眞の愛の生活 是に於ては眞の愛とは四海同胞主義でなければならぬ。實に互の人格を信じ、各自神性（或は佛性といふも可なり）を有するものなる事を信じ、國と國との間に於ては同じくその存立の價値を認め其の國の眞正の魂を認めたならば其の間には必ず同胞關係を見出し得るであらう。さうすれば親族として相互に手をとつて眞に國際的關係を以て宇宙の目的に共働して行くことが出来るやうになるのである。又宗教も各自にその派の特色はあるが、他の國の宗教又他の宗派にも各々希望信仰價値を有するものなる事を認め合はなければならぬ。當今漸く世界に於ても又既成宗教界に於ても此所に目醒めて來たことは實に幸な事であると思ふ。即ち宗教界に於ては各宗派が互に寛容なる態度を持ち兄弟關係の中に大關係を作りこゝに宇宙の目的、宇宙の經綸、宇宙の理想實現の意志に協同し、神と我れとそこに愛を結ばんと希ふに至つたのである。此の愛こそ實に總ての活動總ての傾向を支配するものである。茲に眞の人格の榮と價値とが保たれるのである。眞に永久的價値、美、及び人格の尊嚴を有するものは即神を有する者である。而もこは制限なき所有であつて、こゝに吾人の眞の愛の生活、生の喜び、生活の光輝を見るのである。換言すれば自己の神聖なる殿堂に入り其の無限の人格者に接近して始めて各自神聖なる神愛の中に生きうるといふ自覺が出來、又各自の目的要求に對しての矛盾衝突を融和し得らるゝのである。即ち吾人の道徳的理想と種々傾向要素を融和し眞の調和を見るに到るのである。

哲學者カントは『道徳律が人間の頭にある事を以て神の存在を證明するに足る』といつて居る。彼れの言によれば道徳律即ち吾人の良心に有する道徳的公準は即ちこれ神の本質なりと云つて居るのである。彼れは神の存在といふ事

につき強く主張した。如何となれば『人間が理想を抱きて要求する其の本能の如きものにはそれに應ずる對象、實在があるのである』と。實に、愛と價値と眞理は必ず三位一體のものである。

▲愛の發露は宗教 人間に宗教心、信仰心、又慕ひ憧憬する情のあるは推理的にも哲學的にも直感的にも感じられるのである。吾人の日常生活より見るも若し吾人の良心即ち道德律又はその行爲の動機に神の存在——即ち満足と光りと判断と公準を示す力が——失はれた時には道德の根底は搖ぎ、愛の價値も永遠の生命といふことも無意義なものとなるは必然の結果である。尙今一步進めて考へて見ると若し吾人が神より遠ざかり各自我利的行爲に振舞ふとすればその人々の爲せる國家は我利的に趨り國と國は互に相咀み相倒すことを以て目的とするであらう。此等の國家は文明を維持することは愚か、到底滅亡に歸するより外はないのである。現に今日の歐洲戰爭に於ける獨國の如き其我利的態度を悔い改めない限りその滅亡を見るは明かなる例證である。其の他文明國といへども若し一點の我利的動機が存在するならばその文明その感勢は實に一時的のものであつて之れは早晚滅びゆくべきものであるといふことを斷言して躊躇しない。實際に於て今日英國も米國も佛國も戰前に於けるが如き状態であつたならば其の危機を免れなかつたであらうが幸か不幸か歐洲の大戦亂を惹起してそのために各國は大に覺醒して來た感があるは喜ぶべき趨勢といはねばならぬ。

▲宗教界の使命 さて道德的基礎とは天の公道に基くとの謂であつてこれは實に所謂至醇の人格者に於て行はるゝことである。世界人類の道德が天意と一致し、其の配劑によつて共働する時、人は至醇に生き、天は人をしてその公道を行はしむるのである。此に於て各人の目的の偉大なる殿堂即ち宇宙の境遇と、宇宙の大靈とが働ける一部分なる此の世界——即ち人間の意志であり境遇の一部分たる世界——が人道を完全に建設する働きに、消極積極の兩立の働きをとらなければならぬといふのである。實に社會問題を解決し、其の病源を根治する働きを、すべての者が——男子

も女子も幼者も老人も——心を合せて取らなければならぬのである。こゝに於て其の病氣を治療し積極的に大なる經綸を立て、これを實現し、其の生命を與へ、其の精神を復活せしむるための使命を有するものは實に宗教である。勿論經濟界も政治界も今日は既に動搖腐敗して何れも其の覺醒を要するものばかりであるが、而もその覺醒の大使命を有するものは宗教界であらねばならぬ。然るにその宗教界が他と同じく偽善に陥り世俗的の快樂を貪り我利的城廓を構へて互に争ひ相反駁し相亡ぼすが如き行爲を擅にして居るが如きは、これ實に腐敗も甚しいものである。果して然らば彼れは既に生命を失つた宗教の形骸であると云はなければならぬ。

前にも述べた如く英米佛等は今次の大戦亂によつて大に覺醒しその根底を覆して來た、従つて宗教も時代遅れの形骸にばかり拘泥して居つたものは次第に破れて自然にその價値と存在を失つて來た、而してこれに代る新たなものゝ生れ出んとする趨勢は明らかに萌して來たのである。しかし世の多くの方面には未だこの無聲の叫びを聞かず、道徳は形式に流れて我利的因襲固定の状態に陥り、教育は根本を失ひ、家庭は根底を覆し、社會の何れの方面にもこの大なる目的に進んで共働せんとするの意志を見出し難い。所謂醉生夢死の状態であることは實に遺憾なことゝいはねばならぬ。

こゝに於て經濟界、政治界、學術界、宗教界等すべての社會の分團に宗教的空氣を要する事、又すべての道徳に正義人道の意志に明かなる事、人間の遠大なる目的に向ひ高き理想を有すべき事は實に目下の大要求である。

吾人が眞の愛に働き偉大なる實在者即ち宇宙の意志と、吾人の意志とが共働する時、眞にそこに我が使命を感じるのである。此の時吾人は決して自分の事を全うするのみにて満足することは出來ない、實に、人類の永き習慣の病弊に苦める現世界の爲め、醫となり看護婦とならなければならぬ、其の破れたる根より新なる萌芽を出さんとするものに眞の養ひを運び來るところの働きを遂げなければならぬのである。

これは實に漠然とした關係を説くものゝやうであるけれども決してさうではない、この愛が吾人の日常の行爲の動機となりそれより出でたる態度とならなければ吾人の愛は執着に迷ひ戀着に陥つて眞に大なる生命に入るの自由を獲得することは出来ないのである。然してこの大なる社會問題、國際問題、乃至女子教育問題特に我が教育改善問題、經濟問題、政治問題等は決して我れ一人のみの問題ではない。實に其の良否は世界の運命に影響する事となるのである。されば何人といへどもその身を思ひ國を思ひ世を思ふものは茲に確固たる主義を持し理想を立て經綸を立て、而して實際問題に到らなければならぬ。所謂實際問題に入る前に此の道德的根柢を築く事がまづ大切な事であると思ふ。これ亦吾人の日常の生活に於て眞にその經驗を進めんとして祈り、眞に使命を受くる覺悟を以て一事一物に接するといふことが最も肝要なる事である。

例によつて、次の詩を玩味して冥想の一助としよう。

おゝ、私を墓場の中に探して呉れるな。

よもや私はそんな土の中には居まい。

私は晝と一つになる爲めに暗黒の障壁をつき破つて居る。

私は今まで、流れ去る事物を兄弟として居つた。

まことに哀れな、果敢ない浮いた喜びと、縮み込む様な悲哀に浸つて居つた私は。

これから芝生の草と、陽に浴して居る草とに兄弟の契りを結ばう。

私を経帷子で蔽ふ事は出来まい。

苦痛で磨き上げたこの鋭き、よろこばしき劍をもつ此の私は、雲の中の電光の光、雨の如き軍隊に聯合する。

おゝ、骨鳴り血湧くこの青年の活氣に満つる、靈妙高潮した喜びに充つる俠氣よ、こは宇宙の意志の一部分である。

この私は此の遊星の大勢を貫きさそふ。

我が神よ、天の太陽に於けるが如く。

呼吸の空氣に於けるが如く。

私は相互を組み合せよう。

おゝ、斯の思想を誘引するものは、これ即ち祈りである。

活動を統御せよ

統御といふ事は學校に於ては管理といひ、國家に於ては政治といひ、自分一己に對しては統御、支配など、いふ意味を持つて居る。

吾人が天の使命をうけ普遍的愛、徹底的意志を以て至上至善の人格の中に一致團結してこれより愈々目的の活動を開始せんとするに當り、此の運動を如何に統御し指揮すべきかの問題が生じて來るのである。

宇宙も、世界も、國家も、社會も、乃至宗教も、制度も學校も家庭もすべて悉く多くの個人と多くの個々の事物と、多くの理想目的動機と又多くの個々に働く自由意志等があつて、それ等は各相分れ相合し各種の分團を作り互ひに相排し又相聯合して、永久に活動し發展して居るものであるからその中に普遍的原理が存在してこれを統御すべき何物かゞなければその大目的に向つて理想を實現することが出來ないわけである。

▲活動統御の經驗　この統御について今日迄人類の經驗し來つたものを分類して見ると即ち一、專制的統御、二、自

治的統御、三、攝理的統御の三つに分れる。

而してこの三つは又一つの一大分團となるのである。

一體人間は如何なる場合も團體の統御を受けないものはない。自制といふ語があるがこれは團體の目的自然法靈法に調和統一せんが爲めにつまり團體的統御を全ふせんとするの意味を有して居るのである。もし個人が團體より遊離すれば同時に人格の破壊を招くのである。故に人間生活の歴史に遡つて見ると先づ最初に小屋住居をなし、それが集つて部落をなし、部落より都會を作り、都會より國家生活を生み、これより大帝國にいたり、遂に宇宙の境遇を實現するに到つたのである。これは全く吾人の根底に横はつて居る團體的愛、協同的精神が發動して居る證であつてこれに依つても人類界の全體統御の事實を確認する事が出来るのである。尙この道理を明らかにせんが爲めに左に三種の團體的統御の方法の大略を説明しその關係を明らかにしようと思ふ。

▲專制的統御の時代 先づ歴史の順序に従ひ行けば、專制的統御に就いていはねばならぬ。即ちこの時代は宿命的獨斷の世界で其の動機は本能の衝動的政治から來て居る。この支配を受くる宿命の世界分團は人間の意志といふものを認めず絶對的に運命に依つて支配し統御するのである。故にこの制度の下にある國民又はその團員は人間の其の要求を充すことが出来ない、さればその働きにも人間の價値を現はす事は出来ない。殆ど四圍の境遇に支配せられて唯自分の中に潜在して居る遺傳的傾向に依つてのみ活動するものである。即ちその人の運命は、その生れし階級境遇、その生れつきし性質によつて定まつて了ふのである。故にすべてに於て意志の自由を失ひ、かりにも己れの意志を行ふ事又自ら束縛を脱出して自由を得るといふ事は少しも出来ないのである。つまり主人は主人、奴隸は奴隸、貴族は貴族、貧民は貧民であつて終生その階級地位を變へる事は出来ない。我が封建時代及び現時の印度の階級制度の如きは皆斯の如く宿命的である。この階級の人々はすべての人と同じ特權を喜ぶとか又同等の交際をなし互ひに了解し尊

敬し、同情的生活をなすなど、云ふ事は不可能である。何故ならばその人の觀るところに於ては人々の權力には違ひがあり、その運命境遇に各制限區別がある。故にその人の絶対服従すべき法律は大宇宙の法則ではなく一部分の遺傳的宿命世界である。その狭く偏した世界に住居しなければならぬのである。さればその活動範圍には自ら制限があつて、生れつきその境遇に機械的に動くより外に道も術もないのである。例へば、身體弱く生れついた者はそれは運命とあきらめる外はなく又精神に缺陷ある場合もこれと同様、これを自ら意志を以て恢復せしむるなど、いふ事は絶対に出来ないものと信じ諦めて居る。即ち人も植物の如く、生れたる時の位置そのまゝに少しも脱し變ずる事は出来ないと同じやうに信じて居るのである。さればこゝには改善進歩なく従つて自己の行爲につきても自ら責任を負ふなどといふ事は少い。たゞ本能的傾向や遺傳的習慣等に甘んじて居るといふより外はないのである。吾人の社會がこの宿命に勝利を與ふる事があつたならばその社會境遇は全く固定し停滞してしまふ、言ひ換ふれば下り坂となつて居る時である。例へば植物が一旦その成長に達した後は老境に入りそれより死の方向に下ると同様である。宿命世界の榮枯盛衰は皆かくの如くその家庭其の國家社會を作る個人に於ても各々かくの如くにして枯死するの期を俟つのみである。

吾人はともすればこの宿命の世界に支配されんとするものである。此の統御の方法によればその支配主は君主であつて時に暴君の出づる事がある。而してその統御の下にある民は奴隸か奴隸に等しきものである。即ち暴君の在る所にはその他は必らず奴隸として征服されなければならない運命に立ち到るのである。

こゝに於てこの宿命世界に在る人間は奴隸となるか、將、君主となるか、我が儘をなし我利となるか奴隸となり屈從盲従するか、この二途の外に人間の道はないのである。而してその統御の中心は本能、その生活は孤獨、その人格は分離、その關係は矛盾衝突である。

▲自治的統御 この支配者は人間意志である、精神的である、精神的自由自治的の生活を目的として居る。その中心點は全體意志に置かれて居る。此の國に於ては意志を意志に置き、人生の價値を價値に置く愛國の動機、義務の觀念があり、熱心に協同責任を全ふする團體となり、その自治機關を憲政政治に致し、國會を開設し社會の輿論を指導し國民の意志を指導して全體生活を統御するものである。これ各自の人格を尊重し、正義を重んじ個人の平等の特權を認め、民利民福を増進し團體の安寧秩序を保つといふが如き働きをなす、(即ち自由の世界である。)而してこの力は宿命を支配し遺傳を改善し、境遇制度を革新する。所謂目的に向つて進歩發展するものであつて、これ多く今日の立憲政體に見る所である。然し猶これにても或る場合は政争の渦中に投ぜられ政權の争奪に忙殺されて事實國民幸福を計る事が行はれない事がある。この現状を早く切り開かなければ自治的統御も名目ばかりである。

▲攝理的統御 この理想とする處を擧ぐれば、人間は宇宙の本體の姿を代表するものである。即ち人間はこの宇宙の實在者を社會に代表して居るのである。これその目的は天の意を以て王道を行ひ國を治めて治國平天下を出現せんとするものである。この統御は曩にいふ所の宿命、意志の世界を合せて即ち宿命、意志、攝理の世界が三位一體となるのである。又全體の統御即ち宇宙の調和をも統治する力となるのである。これは人意が天來の感化をうけ、宇宙の心と世界の心、天の配劑と世界の政策とが共働して世界的社會の團體を統御し行く所の力をさして云ふのである。即ち普遍的統一、宇宙的統御である。其の攝理統御の生活の實質は人々の信念生活、人格生活、宗教の歸一により正義人道の上に立ち、寛容なる態度を以て國際的生活の統御を得、その教育、修養によつて得るところの大生命を云ふのである。この統御は總ての統御の本源である。即ち法則もその根元は天より出で、又人間の意志、人道も根元は天より蒔かれたるものである。されど前にも述べた通り人間の性の中には宿命があるが、これは即ち宇宙の自然であつてこれが身體に備へつけられて居るのである。而してこれは又人間の意志であるが此の意志は必ずその大生命なる意志

と融合すべき攝理がある。此の攝理的意志が吾人の中に具はり、而してこれに個性を有して茲に各個人の人格が出来るのである。即ち宇宙意志の縮圖が吾人人間に於て表現せらるゝのである。故に吾人は天意のまゝに宇宙的に考へ又は行動する事を得るのである。即ちこれを徹底的に云へば吾人の意志、身體をも宇内的になし、神の意識を意識し味ふ事が出来るのである。この攝理の世界が人間社會に現はれては宗教信仰となるので、これ即ち人間に神性を有する所以である。

人間の意志の世界は言ひ換ふれば道德世界即ち人道である。又宿命世界は物質世界であるが、これらは攝理の世界と共に三位一體となつて混成體をなし、この攝理の世界がこの中心となつて調和を得ここに又大中心をなすのである。此の大中心とは即ち至上の人格である。言葉を換へて言へばこれ即ち神である。

▲實生活の統御者 吾人の政治界、經濟界、道德界等に於てこれを統御するに當り、君主專政にしても或は共和政治にしても又攝理政治にしてもそこに統御者の意志を代表するものがなければならぬ。而してその統御者は決して獨斷的なるものであつてはならぬ。即ちその根本に天の意志を有するものでなければならぬのである。吾人は各自ある意味に於ける代表者たるべきものであるが、併しここに又必ずこれを統べてゐる大統御者を要する。例へば國にては國王大宰相、大統領の如きものであるが、この位置の人々は皆天の意志を以つて多くの公衆の意志を代表し、大なる活動と共働せんが爲には宇宙の働きをなすとの考へを持して行かなければならぬのである。もしかゝる統御者なきか又統御者にしてこの點を離るゝ時は、教育は死し、宗教は儀式形式に陥り、國家は政權の爭奪を見るにいたるのである。これ統一者に眞の支配力なく、爲めに何れにも合すべき所を見出し得ない爲である。宗教界にしても道德界にしても又經濟界にしても皆同様である。

▲吾れ等の日夜の祈り 人間は下にか上にか何れか一方に偏る力の自由を與へられて居るものであるが、何れにして

も偏しては完全に到る事は出来ない。前にも云つた三つの中心即ち物質、意志、攝理の三世界を貫ける大中心によつて奉仕し、そこに響ける無聲を聞き、これに感動して働くこと云ふ點に迄わが良心を到達せしめなければ眞の生活をなす事は出来ない。實に王道及び天意によるといふことに根本中心を置かなければならぬのである。——教育に信念を離すべからずとの謂は實にここであつて永久の價値を獲得せんがためである。然るにこの信念を無視してたゞ知識を注ぎ込むのみにて足れりとする事の甚だ不可なるを主張したのも、實にこの點を指示したのである——要するに吾人の生活の總てに生命の基礎がなければならぬ。宇宙と一つに調和する精神が働かなければならぬ。天地の大靈者の中に我が心が合しなければならぬ。天の大聯合軍の從軍者とならなければならぬ。即ちこの大靈の意志に入る、天の軍隊に聯合するといふこの信仰、この確信を持つ時吾人は茲に天地相接觸するの感を以て、こゝに祈りを經驗するのである、即ち斯る關係に中心點を置くととき世界に始めて人道起り、四海は兄弟姉妹となり、各々同情を以て共働する事が出来る様になるのである。さうしてこれは吾人が日夜に斯くあらんことを要求して已まぬところのものである。吾人は常に自治といひ又個人的生活といふが、その根本に決して團體的統御の含まれて居るといふことを忘れてはならぬ。然らざれば宿命の統御に陥つて了ふのである。實に大中心に向つて統御を受くるの外人格はないのである。

斯く自然が選び置いたるすべてのものには、必らず統御者があつて全體を指揮し指導して居るのである。故に立場を換へて言へば、特に指導者と選び或は主任者と選ばれたものは、それは決して私の者ではなく、天の命であること忘れてはならぬ。されば眞にその命に従順に行動しなければ決して有効なる働きをなす事は出来ない。恰も宇宙の統御者が自己の意志を統御すると共通の原理である。

そこで吾人の日常生活に於ても如述の第一の本能宿命の世界に活動の中心を置いてこゝに甘んずるか、又第二の自由意志の世界即ち人間意志のまゝにのみ進み行くか、或は第三の攝理の世界に入り全く以上の二世界をすてゝ歩むか

に覺悟を決めなければならぬ。言ふ迄もなく吾人は吾人の自由意志を以て常に上に向上し又下に根を下し眞にその間に調和した三位一體の普遍的愛にその中心を置いてその人格を發揮し、その結合意志を以て眞に實行し得るといふ信仰があつて、始めて活動社會に進軍し得るものである。又然あるべきである。

山上生活に於ける結論會（上）

今夏三週日の輕井澤の山上生活は我れ等に種々の經驗と暗示とを與へた。我れ等は今、やがてこの山上の生活を了へて各自その使命のある所に向はんとして居る。即ち大自然の默示を讀んでこれを我れ等の實生活の上に生活せんとするのである。この時に當つて我れ等のこの精神的一團體がその大目的に向ひ各自の使命を感じて誓つた聖き決心と堅き團結はもとより一時的の感激ではない。永い間求めて止まなかつた生命の泉を見出し、その源泉から迸り出づる生命と生命の團結である、生命と生命の誓ひである。故にその態度は恰も使命をうけて天軍を組織する勇士の如く、永久の目的の爲に不斷の努力を以て當らんことを覺悟して居るのである。

併し我れ等は尙衷心祈らざるを得ないのである。——どうかこの屈せず挫かざる勇猛心が實生活の上に常に潑刺とした生命に生きんことを——祈るのである。人生の行路は決して平坦ではない。我れ等の今後の行進曲は決して平和輕快のものゝみではない。否益々深刻に、益々悲壯の曲を奏でつゝ聞きつゝ進むことであらう。永き醉生夢死の生涯よりもその使命に醒めた今後の生涯は從來よりも踰ゆるに困難なる山もあらう川もあらう。其の時、果して今、美しき大自然と對して聖き心に映つたこの氣分が存續するであらうか。これは人間の弱點であつて、かゝる時は誓つた心にも嵐が吹き信じた心にも迷ひの雲がかゝるのである。

人生には、正しい者が必ずしも正しい者と信じられない場合もある。或ひは又表面的の淺い見解の間には誤解を受

けることも屢々起る。斯ういふ困難に遭遇した時その人々の信念生活は強い試みに遭ひ鋭い砥にかけられて鍛錬されるのである。我れ等が衷心に祈るのはこのことである。如何なる試に遭ふとも如何に熾烈なる鍛錬を加へられ様とも、其處には火にも水にも死なない強い決心が生きて行くやうにといふことである。

人生の困難、蹉跌、誤解は皆生活の旋律である。大自然の樂律である。この樂師は人間ではない、故にこの樂の聞手たらんとするものは、人間を相手として聞き分けられないのである、實に宇内、天地を相手として且つ聞き且つ合奏する所の音樂師であらなければならぬ。即ちその態度を以てこの人生を味ふ時は、無音裡に人生の壯美の曲を聞き歡樂盡きざる旋律に喜び止み難きものを見出すであらう。或る詩人は次の如く謳つてゐる。

私は風の如くに謳はう。

生みの心配、雨の壯大とを懷いて——吹く秋風の如くに——。

私は暴風雨の如くに謳はう。

吹雪の冷たき手に摺まれて、悶え、叱しつゝも——。

私は原野の如くに謳はう。

満足して睡氣さす神祕的なあたたかさに歌ふ原野の様に——。

そは私も原野の一部分なるが故に、風や、電光も、矢張り私と親類なるが故に、

原野が愛して居る様に私も愛する、

暴風雨が悪んで居る様に私も悪む、

暴風雨が失望して居る様に私も失望する。

河が喜ぶうたふ様に私も喜ぶうたふ。すべての氣分に私の氣分も合して謳はう。

我れ等の友は大自然であり、我れ等の師も又大自然である。宇宙にありとあらゆるものは皆我が兄弟であり我が肉親の一部である。山は自然の姿を表はし川は宇宙の心を奏でゝ居る。人間がこの世界に於てものを學ぶといふことは即ちこの宇宙の黙示を読み、その音楽を聞き、その鍛鍊をうけることである。我れ等の山上生活の幾週間に亘る修養の目的もこの意志を養ふに外ならぬのである。米詩人バンダイクが我等の學校といふ詩に

私は初め、皆人が賢くなるといふ此の世の學校に心を入れた。

さうして私は、

私の心に斯ういひ聞かせた。

「私の心よ、

規則を學んでおいで、

一つの褒美を貰つておいで、

そして、それらが得られたならば、

直ぐ又こゝに歸つておいで」

と、

間もなく、私の心は歸つて來た、
おぼえず、私は、かう叫んだ、

「一體、お前のどこに、その獲物を持つて居るのか」
あゝ、あの學校に行きは行つたが、

何一つ、本當の事は教はらず、
其の獲物とは、

ただ苦痛、たゞ煩悶、

その外には何も無い、

おぼえた先生の名は傲慢、

學ぶ知識は虚偽であつた。

私の心の答へはかなしかつた。

それで、私は學校を替へた、

其所は、鳥が楽しく歌つて居り、

小川が涼しく、清らかに流れ、

野の花が一面に咲き滿ちた

原野の森の學校である。

私はこゝに全く心を置いた。

しばらく経つて私は尋ねた。

「おゝ、私の心よ、

こんなに永い間、何故、

お前はとゞまつて居るのか、

一體、お前はどこにさまようて居るのか」と、

その答へは、

笑ひをふくみ、樂の調子は、

よろこばしく、――

「あゝこの學校こそ、私の楽しいホームである」と。

實に吾人がまだ世俗的な、空虚なものを求めて居る間は、眞の生活は出来ない、吾人はかゝる所より脱し、實に生命あり、興味湧く、眞の實を結ぶ學校にたちかへり、こゝから我が生命を見出して行かなければならぬ。かくなつてこそはじめて、使命を全うすることも出来るのである。

▲婦人の新使命 近時歐米の婦人は世界大戦亂の巷に在つて大なる刺戟をうけ、茲に新たなる使命を感じて立つた。具體的の一例を以ていへば彼の歐米婦人も從來に於ては婦人の根本的活動は社會に於ける慈善事業或は傳道等にその理想を置いて居つたやうである。然るに此等の事業にも亦その活動にも今一つ逆つてその根本に於て養はなければならぬ力があることを近時氣付いて來た。即ちこれ等の社會事業にも、乃至宗教教育の制度問題に於てもよほど行詰つ

て來たのである。即ち國際關係、人類問題、世界の文明問題について考ふる時、從來の制度を以つてしては必らず其所に矛盾を感じざるを得ないのである。此所に於てこの制度を改善しその立場を今一つ根本的なる所に置かなければならぬことに氣付いたのは婦人である。婦人は精神界の機微に感觸することが出来るものであるといふことはこれまで屢々説いたことであるが今回のこの覺醒も亦婦人の間に於て先づ實行せられんとする曙光が見えて來たのは世界の爲に喜ぶべきことであるといつて過言ではないと信ずる。

この制度改革問題、國際問題、世界文明問題については從來も永く蓄積し來つた世界の問題であつて識者の間には夙くよりその病根の救濟方法を考へないでもなかつたであらうが而も今日迄等閑に付せられて居つた結果は、今日の世界の物質主義を作り上げてしまつた。さうして天啓の暗示を早く悟つて先づその改革を叫び自ら實行に着手せんとするものは婦人である。此處に於ても亦婦人自ら使命を暗示して居るのであるまいか。

世界の開闢史を繙き、その發展を遂げたる國家の起源及び宗教の起原等を調べて見ても、其處には必ず婦人の手實に婦人の精神にて成される居るものゝある事が明かである。我が帝國の祖、天照皇大神も女神であつた。又世界最古の文明を有するといふ埃及の神はアインスといつて矢張女神である。なほ希臘ローマに於ける宗教の神も亦女神である。これ等は實にたゞその一例に過ぎぬことであるが、以上の如く國の開闢に於ては女性の世界がその精神を支配して居つたのである。

而して今日この世界の物質主義の弊を救ひ、これを根本精神に導き出した者も亦婦人の力である。然して今後の努力も亦婦人の力に俟たなければならぬ。實に婦人はその先天的感化力を以てよく物質世界以外の目に見えぬ精神世界を察知しこれを統御する力と確信を有して居る者である。往々にして「婦人の弱き力を以てよくその大使命を遂げ得るか」を自ら危ぶむ人もあるがそれは未だ使命に醒めざるものである。

今世界の婦人がその大使命に醒めこの目的を以て活動するに至らば如何に今日の如く物質主義に攪亂せられたる世界と雖も必らずこれを改善し眞の目的に向つて救済することが出来るであらう。況や第二の國民——即ち次の世紀の人類は悉く婦人の手に依つて育てらるるものである。さればその國家社會の教育の制度改善も亦婦人に依つて作らるゝのである。

今回の歐洲大戰に於て見る如く、男子は悉く戰場に出で、而も既に幾千萬人の戦死者を出したことであらう。その各自の母國に於ける婦人も亦この際手を拱いて居ることは出来ない。彼れ等は外に男子の出征を勵まして世界人道の爲に戦ひ、内には自ら夫及び青年男子に代つてその業務を執り或は又その立場々々に於て文筆を以て、勞働を以てあらゆる方面にあらん限りの力を盡して社會百般の有機的活動を持續して居る。これ等を以て見ても、今迄弱き婦人としてその活動をも與へざりし社會が、今日その婦人の力に依つて如何に救はれつゝあるかの證據として見るべきものであらう。この現象は婦人に活動の機會を與へられたると同時に又男女共働の精神の徹底したる社會の反映と見るべきものであらう。

世界は既に斯の如き機運に向はうとして居るのである。過去眠り勝ちであつた東洋の婦人も亦大に覺醒する處がなければならぬ。更に東洋婦人を代表して居る吾が日本婦人は茲に大に期せなければならぬ時である。吾人は先づ東洋を救はなければならぬ。即ち我が東洋に於ける國家社會の教育改善の實は、これを東洋婦人自らの力に俟たなければならぬと信ずるものである。日本婦人の使命も亦まことにこゝにあるのである。この重大なる使命の中に立つ我が國婦人が其の目的に對する成功失敗は決して尠少なものであることを覺悟しなければならぬのである。及ぼし延いて東洋の運命を左右するにいたるものであることを覺悟しなければならぬのである。

▲起てよ日本婦人 この考へは我れ等に斯くあるばかりではない、世界も斯く見るに到つたのである。殊に支那印度

に於ても其の先覺者は我が國に深き期待を有して居るのである。こゝに其の一例として印度皇族マイソール王弟より、過日余に寄せられたる書簡を披瀝して其の如何に印度國がわが國婦人界に期待しつゝあるかの一例としよう。(王弟は昨夏日本女子大學校を參觀せられた事がある。)

「女子教育は印度人が常に注意を拂つて居る大問題である。而もこの大問題は教育の普及未だしき我が印度國にての解決は實に前途程遠き有様である。こゝに於て私見を吐露すれば、貴國より高等教育を受けたる貴婦人が、我が教育界に入り指導せられんには實に大なる刺戟を得らるべしと思ふ。實に昨年も願ひし如く、貴國女子大學校の卒業生にして我が國に來り、皇族貴族の家庭を補け、指導せらるゝならば如何に大なる影響をうけ、ひいて兩國親善の爲めにもよき結果を來す事必せりと思ふ云々」と。

かくも大なる信頼を我が國女子高等教育に置かれて居るのである。而してこは營に印度よりの聲のみではないのである。こゝに於て我が國に高等教育をうくる婦人は、實に東洋に責を負へるものと云はなければならぬ。なほ又西洋婦人が我が婦人と共に手とり世界の平和運動に力を致さんと申込み來れる要求に對しても、實に慎重の態度を以て日本婦人がその使命の奈邊に存するかを熟考せなければならぬことであらうと思ふ。

さらば其の目的に向つて進むには如何なる修養と訓練とをなすべきかといふに先づ各自個人がその心を合せ、その精神の融合を圖らなければならぬ、即ち精神の一の軍隊を組織してその步調を揃へて進まなければならぬ。實にこの團體的訓練といふことは精神界に於ても最も大切である。即ち宇内の統御者の命に服しその規律を守り秩序を立て、各自の責を全うしなければならぬ。其處に各自が相助け相解し共鳴共働し進まなければならぬ。茲に於て初めて吾人が根底ある歸一統一の生活を營むことが出来るのである。

バンダイクは、

もし、吾人が自分の生活を正しく保たうと希ふならば、吾人の爲す事、行ふ事を學ぶべき四つの事があるといつて居る、即ち

第一、混雜を避けて明晰に考ふる事。

第二、眞心を以てわが周囲の人々を愛すること。

第三、行ふには眞實の動機を以て純潔なるべきこと。

第四、神と天とに安心を置く事。

吾人がかたき決心を以て進まんとする場合にも多くの誤解困難は免れぬ事である。然し眞に喜んで使命の爲に働かなければならぬ。吾人はせまき自己を脱し眞に大なる使命に生きんとする時その困難苦痛も喜びと化するのである。即ち我々の義務が喜びに到る時人生は實に神聖となるのである。

山上生活に於ける結論會（下）

——責任は喜び——

我れ等は今、各自の使命に向つて進軍の勢揃ひをして居るのである。この時我れ等は如何にしてこの態度を人に及ぼして行くべきであらうか。

それは即ち自分が甦生した經驗と同じ經驗を人にも及ぼして行けばよいのである。バンダイクの『生活の四ヶ條』を繰り返していへば我れ等は先づ第一、『眞リヤリチを考へること』が必要であると言つて居る。彼が混雜を避けて明晰に考ふる事といふのは即ちものゝ眞を見出さんとしてそれに頭腦を勞せよといふことである。自分は果して今迄正しい事を正しい事となして考へて居たであらうか、大事なものを大事にして居たであらうか、忌憚なくいはしむればこれ迄

大事なものとして心を放たず守つて居つた自己、それは自己の形骸、眞の自己の牢獄ではなかつたか。この牢獄は永く自己の靈を縛り居つた、併し自分にとつてたゞ一つこの重く閉した牢獄の戸を叩くものがあつた。それは『愛』である。愛は縛られたる自己にとつて唯一の天使である。自分がこの愛の天使に導かれてその閉した牢獄を開いて出た時のやうに、人にもその率直な眞心を以つて接したならば、誰かその眞心を拒むものがあらう。バンダイクが第二に、眞心を以てわが周囲の人々を愛すること、といふのは其處である。そして彼は第三に『行』について次の如く言つた、即ち行ふには眞實の動機を以て純潔なるべきこと、と。我れ等が行ふといふことの前には必らず動機がある。この動機に注意しなければならない、例へば愛の天使が導く道は或は最初は暗い困難な道があるかもしれない。併しその動機に於て正しく純潔であることを信ずるならば即ち眞の愛であつたならば其の道の最後は明るい世界に開かれるのである。動機が純潔であれば人は安心立命してその事に就くことが出来る。さうして人々の自己が安心を得るといふことは天に信賴を置くといふ處にあるのである。これが生活のすべての『根本』となるのである。

さて、この四つの事を眞に解してそれを行つて初めて我れ等の生活は堅固なる信念の土臺の上に築き初めらるゝのである。其處には義務、責任、使命を全ふする喜びのみあつて困難苦しみはない。其處には光明、感謝のみあつて、暗黒不平はない、幸福は我が使命を全うすることであつて、義務は喜びであり、努力は楽しみである。バンダイクの詩の中には以上此等の心持を屢々謳つて居る。左にその一二の詩の意味を紹介しよう。

『我が喜びは使命である

使命は喜びである』とは

太古へブライの先人が訓へた金言である。

人生の高嶺に向ふ時

其の絶頂を仰ぎ見よ

其處には『愛』と名づくる君が立つて

さうして彼はいふ

『使命が喜びである時

人の生命は神聖である』

彼れは又次の如き詩を謳つて居る。

若し、この私の魂を

縛り得るものがあるとすれば

そは、自己といふ牢獄のみ

又、その門を、

ひらけと命じうるものは

愛と名づくる天使あるのみ、

その愛が、汝を召しに來た時

起つて速かに彼に従へ

彼に導かるゝその道は

暗黒の中に、横つて居るかも知れない

しかし、遂には

輝き燦とした光明世界に到達する。

前にも屢々述べたやうにこの愛の力ほど自己の牢獄を破るに鋭利なる武器はない。先づこの武器を以つてわが自己を破つたやうに、我が隣人わが友に接する時もこの愛を以つて訪つるゝといふことが根本精神でなければならぬ。吾人が眞に大なる使命に向つて進軍せんとする時これを進めこれを導く者は唯愛これのみである。

北國の高い山の頂に

縦の喬木がたゞひとり

寂しく、寂しく立つて居る。

吹雪が眞白い衣を以て彼の身幹を被ふ期間

彼れは、友を夢みて靜かに眠る——遠い南の國の、熱い炎けた砂の中に

沈黙に耽つてたゞひとり立つ棕櫚の木を

如何に、如何にと思ひつゞけて。

といふ詩がある。我れ等も亦この詩に共鳴して謳ふことが出来る。我れ等は今この輕井澤山上の大縦の下に集つて幾日かこゝに尊い經驗を得たのである。さうして今は各自が天地の偉いなる靈の呼び聲に醒まされ、眞の自己に覺めて各自の使命に殉ぜんことを天地神明に誓つたのである。——我れ等の靈の結合は永久である。我れ等のこの精神的結合は決して相離れはしない。といふこの尊い經驗を決して忘れてはならない。

人はその肉體に於ては、遂に相離れなければならないものである、而も困難は益々集つて来る、その時我れ等の靈の交友を思ひ出づることが出来たら我れ等は困難の中に在つて最幸福なるものである。恰も北方の喬木が南熱帯の地に在るその友を念つてその念頭より離さざる如く、我れ等は如何なる場合にも孤獨ではない、又今茲に仰ぐ（瞑想場とし

た山上の大樅の樹下に在て、喬木の過古をも偲び見るに、彼れは幾多の嚴冬烈しき吹雪にいためられ、深き白衣にうづもれつゝ、しかもその生を全うして來て居る。又幾多の夏の間にはおそろしき雷電に打たれた事も一再ではなからう、しかも健全にその生を全うして斯の如き大樹と成長し嚴然と屹立してその使命を遂げつゝ來て居るのである。我れ等はこの樹をも心なきものと見ることは出來ない。我れ等はこの樹下に幾度かの自己の内的生活を省み又幾度か此處に來て宇宙の靈の默示をも訓へられた。而も年々歳々多くの人々が去來して無邊に靈の交通をなし無限に自己を擴大するの經驗を得たのもこの樹下である。この樹をおもへばこの樹下に集つた靈の交友を忘れることは出來ぬ。今や我れ等が世に立たんとする時我れ等の前には實に豫期以上の人生の吹雪もあらう、熱砂に熾き盡くされるやうな暑い日にも遭遇しやう、或は又霖雨に、暴風雨に、電光雷鳴の烈しい天威の危険に遭遇することもあらう。實に我れ等が絶對の偉力に對すれば恰もこの山上に寂しく立てる喬木と等しき境遇に在るのである。さりながら我れ等は喜びを以つて繰返す言葉がある。即ち『吾人は如何なる場合にもたゞ孤獨で苦しんで居るのではない、遙かなる遠方の友が自分を思つて呉れて居る、自分も亦友を思つて心を一つにする事が出来るのである』と。

曉の明星が奏しはじめた大合唱に有限な我れ等人間も

調子を和して歌ひ歌はう。

おゝ

父の慈愛は我れ等の上を統御し兄弟の愛は人と人との心をむすぶ、

あゝ

そこに天地の偉なる樂の音が響きわたる、

さうして

人生の戦ひの眞只中に居る我々は

いつもく歌ひつゝ

勇みに勇んで進軍する

おゝ

喜悅に満ちた歌ごゑを

太陽の方にはり上げて

人生勝利の凱歌を奏しつゝ

歌ひに歌ひ

進み進まう。……(バンダイク)

我々の前途には如何に困難苦闘があらうとも最後は生命の勝利である。天地の大生命と共に在る生命の勝利である。この生命の勝利を謳ふ我々の凱歌は常に我々をして太陽に向つて、永久に向つて向上せしむるものである。この人生歡喜の音楽こそは、即ち星が歌ひ初めた天地の大合唱である。

我れ等はいま、この結論會に於てその大音楽を聞く心地がする。さうして感謝の念に充されて居る。此處に於て、この吾人の衷より出づる感謝の心のその實在は何者なるかを考へざるを得ない。實にこは種々の心の流れが相混じて或は感謝又は憧憬となつて現はれて來るのであるが、その根元は大なる宇宙の生命に溯つて居るものである、而して又吾人が特殊的に經驗して聞いた其の愛のさゝやきは決して一時的に發し起つたものではない、實に永き間流れ流れて今日に到つたものである事を思ふ。今朝こゝに味つて居るこの喜びは決して今のみにして高潮したものでない。以前より流れ來れるその潮流の中に吾人が合し得たのである。まづこのよるこびの流れを辿り溯れば我々の爲にこの山

上生活を開かれた故三井三郎助氏を思はざるを得ない。故人は實にけふのこの奏樂のはじめての根に貢献した人である。

實に吾人一己、又この樹一本が成人し成長してはじめて今日のこの天地の樂を奏するに到つたものではない、そこには必らず根に溯つて見れば長き由來があるのである。

さて私はこゝに熟々と考へ起さざるを得ない。一體吾人はどうして此の世に生れ、又如何なる經驗をして今日に及んだであらうか、といふと先づ私のこの人生に對する最初の經驗を以つていへば母の愛といふものである。この母の愛といふものは不思議なもので自分の生涯にとつては僅かな記憶が、而も自分の全生涯を支配して居るのである。動物にはこの經驗がないので、唯人間に限つて既に亡なつた母の愛を忘れることが出來ない、それから又私は父に對する尊敬の念も母の愛に對すると同様である。兩三年前私は三十年目かに郷里に歸つて父の墓に詣で其の前にひれ伏した時の感じは、さながら父を其所に見るかのやうな感じを以つて無量の感慨を禁ずることが出來なかつた。それから又わが先祖のことに思ひ至り、ひいては祖國——祖先と涯しなく考ふる時自らその人々に尊崇の念を生じ又感謝の情が起つて來る。動物にも恩を知るといふことがあるやうであるが併しこの崇拜ウオウシツブといふことはない。さうして見ると唯人間の心の絲にのみ響いて動く所の不思議なる天地の音樂ミュージックがあるものといひ得やう。それが即ち人間の人間たる生命のある所である。即ち人間の意志であり良心であり、愛であり、又その目に見えぬものゝ生命に憧憬するといふ情、言ひ換ふれば人生の詩や歌になる所の感情がそれである。さうするとどうもこの我々が經驗する所の生命といふものはどうしても其所に根元をなして居る偉いなる永久的なる一つの流れがあるといふ風に考へられる。

即ち吾人が經驗し得る所のそれは遺傳的のものであつて其所に親もあり先祖もあり又世界もありその世界を創造り給ふた神もあるといふことが考へられる。實に宇宙の實在はこの偉いなる源流でありその大意志、その大潮流は永久

から永久に流れて居るものである。吾人が無言の星の輝きにも一種いふべからざる崇敬の念感謝の念を持つ所以はこゝにあるのである。而してこの大生命の流れが奏する旋律こそは天地の大音楽である、天地の合奏である、この合奏の調和が即ち我れ等の世界に調和統一を示すものである。

然らば今此所に我れ等が瞑想の結果、經驗し得たるこの感情、この意志、即ちこの天地の合奏は無始より起つて無限に渡るところの大音楽であつて唯偶然のものではない。されば我れ等の愛がいま宇宙の愛の琴線に觸れて共鳴しつゝ尙その合奏に勵まされつゝ遠き將來の運命に向つて勇進せんとして居るのである。嗚呼、何たる喜びであらう、嗚呼何たる深意義を有する事であらう。この深き感はずめんとして而も禁ずる事をえないのである、我れ等は實に歡びにみちて感謝する。何に感謝するかといへば即ち我が父に對するが如く又母に對するが如く、尙その前に溯つて親の親人格の人格を創始したその大人格に向つて感謝するのである。この心持は矢張詩を以ていひ表はすことが適當であらうと思ふ。故に左に其の一例をかゝげる。

喜ばしきかな、喜ばしきかな我れ等は爾（至上人格）を讚美崇拜する。

榮えの神よ、愛の主よ、

我れ等の心は太陽の前に笑める花の如くに爾の前に發揚する。

太陽は花の上にある愛の日である。

その如くに、爾はわが罪を悲哀の雲、猜忌と暗黒の世界を照らす。

おゝ、限なき喜びの與へ主よ、いつも／＼晝の光を以てこの私を充したまへ。

こゝに諸子が経験した事はまことに偉大に、深きもので、言葉を以て表はす事は出来ない、實に詩を以てしても云ひあらはす事が出来ないのである。

そこで終りに我れ等がこの山上生活に於て経験した経路を考へて見ると、初めまづ哲學的立場から入つて次に直感的に進み、即ち詩になつて所謂エキスタツシーに酔ふといふやうなる其の経験の頂上に達して來たのである。即ち無限なる世界に入り永久より永久に流るゝ旋律の波に觸れたのである。

所謂天地の大合奏に加はり、そこに眞生命、眞價値がある事を味ふ所の貴き経験を得たのである。而も一體その眞髓は何であるか又こゝに諸子が確實に掴みえた實體は何であるか、それは實に人間のみと與へられた不可思議なるものであつて、これは到底言葉や形を以ていひ表はすことは出来ない。たゞ詩によつてその氣分を味ふより外に道はないであらう。例によつて左に簡単な詩を掲げて見よう。

時は飛び去り

美しい花も凋落てしまふ

新らしい日は來た、新らしい道も開けた併しそれも亦逝つてしまふ

それ等はみな自分の傍を通り過ぎて行く何一つ自分と一緒に止るものはない、

しかし、しかし、

たゞ一つこゝに愛のみは残つて居る。……………

又次の詩も面白いと思ふ。

あまりに事物を待ちのぞむ人の爲めに時の經つのは遅すぎる

恐れと心配にとざさるゝ人の爲めには、時の過ぎるは早すぎる。

實に時、

うれひに沈む人にはおそく

喜びに滿つる人には早すぎる、

おゝ、されど、

愛する人の爲めには

時はない。

といつて居る。

これが我れ等に不思議なる力を起し來る所のものである。愛は天地の根元である。これが祈となり、力となつて不思議な神祕を起すのである。實にこれが永久の歌となるべき久遠の生命である。實にこれを捉へ得る事によつてのみ人は天地の偉大壯嚴なる合奏に加はり歌ふ事が出来るのである。

(大正十二年七月出版)

